

は、古の人の喜びであつた。何んといふ大な言葉、大な心であらう。佛心を得得すれば、これ等の表面にざら／＼する世濁の只中にあつて、能く地の柱となり、清涼の風となり、温い太陽となつて世を照すであらう。彼が市にゐても、又田舎にあつても。

一七、海の人

一、築港

晝は温い師友の情感の中に入りひたつた。僅かの訣れなれど、海をへだてた熱地の旅と云へば、云ひ合はさねど、しんみりした離別の言葉が、ちやうど一つばいになつてゐる水の自づとこほれるやうに、快く取り替はされた。けれども待ちに待つた船はとう／＼来ない。それは明日の入港であるといふ。夕ぐれ見送りの師友は名残惜し氣に歸られた。

雨が降り出した。三階のガラス窓を通して、港のこゝかしこに點ぜられた火が重い光を放けてゐる。沖から吹いてくる汐風が、折々けたましく窓ぎわの瘦せた木を動かして、ガラス障子に衝かる。

読みかけた本にも倦じて、椽のガラス障子から海の方を眺める。海は黒い、遙かの海角に一點の燈が見える。それが海の眼のやうにも思はれる。じつと見つめてみると、自分といふものが、未知の無邊際の世界に、たつた獨りたつてゐるやうに感ぜられる。寂寥と、倦怠がすうと黒い翼を張つて来て、全身をつゝんだ。

何んとも知れぬ苦痛が何處か心の一部面に芽ぐんだ。それは水中にボチリとインキを落したやうであつたが、やがて身體ぢつに擴がつて、堪へられなくなつた。何んの苦痛であるかしれぬ。息苦しく、頭重く、倦怠は一種嫌な熱氣とかはつて来た。自分は矢鱈に廊下を歩いた。三階の他の室に人一人をらぬ。更にその室内を歩きまわつた。

數分の後、室に坐つた。雨の音は淋し氣に、バラ／＼と亂れ来て雨戸を撲つ。靜に瞑目した。

自分はいま廣い／＼雨の野に立つてゐる。夜は限りなく暗く、寂寥は四方から襲

うて来て、膚を徹して忍び込む。それをどうすることも出来ない。只彼等のしたい放題にしておかねばならぬ。その怪物どもは、空家のやうに自分の心の中にぎつしりと入り込んだ。それをどうすることも出来ない。只瞑目して呼吸を整へ、靜に考へた。

茲十數日以来、私の心は餘りに外に向つて流れた。そして熱病患者の夢を見た。周圍はその夢を益深みに導いたが、寂寥はいま私の魂を呼び戻して、空虚の室に請じてくれた。私の魂はいま無限の望みに飢えてゐる。私になくてはならぬものを求めてゐる。意識の光りの照し得ぬ盲目の強度をもつて求めてゐる。私は小な自分を投げ出さねばならぬ。これは無生命な外的の附加物を拂ひ除けて、産れいでんとする陣痛である。

私は瞑目して呼吸を整へ、敬虔な念をもつて靜座した。ちやうど妃が第一の皇子を産まんとする喜びと恐れをもつて靜座した。

雨は益強く降り出した。夜は次第に更ける。築港行の電車がけたましく家をゆすぶつて、暗の中へ消えてゆく。そして離室から三味線が聞えだした。どつと騒々しい笑ひ聲が聞えるかと思ふと、女の優しい歌が流れてくる。

けれども私の心は深く落着いた。是等の浮々した刺戟もその時の私には何の力もなかつた。それどころか却つて私の靈を太らせ、一種微妙な濕ひさへ添えてくれた。其夜私の第一の智慧は私の過去を照した。そして運命の姿を見せてくれた。沈黙の喜びは全身を領した。

二、夜話

「船はさつぱり動搖ぎませんな」

と二十一歳のシドニー行の青年が云へば、

「なに、まだ海ではありません。紀州の出つ鼻までは邊の中ですよ」と事務長はシガーを燻しながらいふ。

「私も二度ばかり亞米利加へゆきましたが、一遍も暴風に逢うたことがありません。

今度も是位で済ましてほしいんですが」

と巻煙草を灰皿へ押し込んで寝巻の兩腕を組んだ男は、三十八九の眼立つ程廣い顔をしてゐる丈の低い商人である。

「今度は大丈夫でせう。小笠原島を超えれば、もう風はありません。氣候もいい時ですから」

といふは、船員の一人で、五十を超えた、一寸見るとブツキラポーな無愛想な男である。事務長は夫の言を引きとつて、

「併し一度は暴風の経験も面白いです。そこで好んで我々や船長の技倆をお眼にかけることが出来るんですから」

「それは無論、船が難破しない範圍内に於いてとせうな」

と私が云へば、皆どつと笑ふ、

「だつて是ばかりはさうお誂へ向きにはまゐりません」と事務長は語りつゞける。

「私は永い間船に乗つてゐますが、覺悟したのは兩三回あります。日露戦役の際私は廣瀬中佐の一行に加つて旅順の閉塞に出掛けました。いや軍艦から汽船に移り移つて歡送された時は、嬉しいのか、悲しいのか、たゞもう無性に心が張り切つて、なんとも云へない程壯絶なものでした。併し一行の中でも私達は後方にゐて閉塞を見届ける役目でしたから、此通り死にはしませんでしたが、廣瀬中佐の肉塊をもつて報告に歸つた時も、實に感慨無量でした。

そして決死隊に加つた爲めに一應休暇を買つたのですが、船が門司へ着いても軍機を漏らす恐れがあるといふので上陸させないのです。是には弱りました。

其後軍人をやめて汽船に乗り込んだのですが、大暴風を喰つて、愈駄目と覺悟して、板を脇狭んで、今飛び込まうか〜と思つて恐ろしい海上を睨んで、立つ

たことは二度ありました。

なぜ飛び込むといふのですか。それは船が沈む時に吸ひ込まれる恐れがあるからです。さうなつたら大抵はいけません。併し船の沈む前に飛び込むといふことは申々出来るものではありません。矢張り強い未練でせうね。今となつては飛び込まなかつた方がよかつたんですけれども」

一同吸ひつけられたやうに事務長の興奮した顔を眺める。ブツキラボー君この時口を開き、

「飛び込むといへば想ひだします。大連から門司へ来る途中でした。病氣の娘を連れてた母親が、狂氣のやうに船長室へ馳け込んで、娘を探して下さいといふです。其時船は玄海灘へ差しかゝつてをりました。そこで大騒ぎに探し出す。乃公は水夫共に、おい貴様達、娘がをらなくなつたといふが、お前達が隠したのでないかつて、戯言をいつたら、そんなことはないと云ひます。成程矢張りるません。何

んでも三十分も前に飛び込んだのですな。三十分も前ですから、はや二三里も船が奔つてゐるんですから、探しても駄目なのです。

母親は泣いてゐますから、私は第一あなたの落度ですといつて慰めてやりました。何んでも深い譯があつて、娘がそれを心配して病氣になり、半分氣も狂つてをつたらしいです。娘といつても縁付いたのださうですが」

一語ごとにと取つて投げるやうな訥辯で、單純な先生が、平つたい觀察で語る事柄の中に、人生のあらゆる哀愁と、悲痛が盛られてある。遠い他國で夫に捨てられたのか、病氣に罹つて夫と離れて、母を頼りに兄夫婦の厄介になるやうになつたのか。傍觀すれば珍らしくもない出来事であるが、娘と母の身になつて見れば、限りない悲みである。そして其悲哀も愛著も、この恐ろしい黒い海の中に、黙々として葬られ去るを思へば、無邊の生死海といふ文字が、魂に迫つて來て、息苦しさを覺える。そして此男が泣いてゐる母親に「あなたの落度です」と勢一つばいの親切で慰め

てやつた光景を想ふて、言葉でない魂だと思はせられる。

そこへボーイがカツヒールを持つて來る。期せずして開かれた食堂の談話會も了りに近づいた。船に碎くる波の音は驟雨のやうに人々の心を濕した。

三、遠州灘

船が遠州灘を通る夕ぐれであつた。

「こゝが明いてをります。こゝへおいでなさい」

と一人の男が自分のきてゐた毛布を引き寄せた。三等室といふは名ばかり、荷積みの大きな場所を、三方に遽か造りの棧敷を廻はして、上下に船客はごろくしてゐる。見れば自分より先に一等室の御客が五六人あちこちに轉がつてゐる。今朝の熊野沖の荒波にゆすぶられて、船客の多くは一日ちう飯をとらずに青い顔をしてゐる。古い船で一等室が後方にあるので、上下の動搖が甚しい。そこで氣のきいた船客は朝から三等室へ逃げ込んでをつたのである。私が上の棧敷へ上ると船窓の光線で雜

誌を読んでをつた男が、起き直つて。

「また御出ですか。それでは一等室の金が泣きますわい」と皮肉をいふ。見れば赤ら顔のがつしりした中年の男で、額が廣くて、鼻が高い。

黒ずんだ絹の寝巻を着てゐる。兵隊上りの渡航者と睨んだ。「まあ、かうなると、金が泣いても仕方がないですな」と輕う受け流して、ボーイの持つて來て呉れた枕に頭をつけた。

「是位では暴風なんていはれないのですが、それでも婦人なんぞですと、そつちこつちでけぶくやりますよ。男はこれで感心です。誰もやりませんからね……」

どれ皆さんのおかげで場所が狭くなつた。少し着物を片附けませう」
頻りに着物を疊んでは行李に入れてゐる。向ふの棧敷には元氣の好い連中が三四人をつて、

「おい、れこが泣いてるぜ。罪なことをするな」

「何いつてるんだい。泣く奴なんてありやしない」

「何んだ。貴様はまだ提燈つけよつたな。艶文でもかくのか。何、將棊さす、おいよしてくれよ。そんな二人丈で面白いことするのは止せよ。それよか、れこから教はつた歌でもやれよ」

「八釜しい奴だね。れこく／＼てなんのこつた。そら飛車とれだ。」

遽に先の男が棧敷から首を出して、呻り出した。腹と肩を一所に波立つて、けぶけぶやつてゐる。先生あんまり身體を動かした過ぎたのだ。起きて脊中を擦つてやらうとしたら、止めた。

「矢張り身體を動かさしちやいけな。もう大丈夫だ。でる丈出てしまつた。」

自問自答してゐるが、やがてボーイに頼んで水を貰ひ、口を漱ぐと、驚いた、又パンを嚙り出した。腹の中が全く器械のやうに頑健と見える。向ひの將棊さしは、

「やい、咬いことをするな。その手は喰はないぞ。」

一方の棧敷からは尺八が聞え出す。たいした上手でもないが、浪の音と和して、そろそろに哀愁を催さしめる、サノサ節から追分に移り、とうとう騒々しい元氣連を凹ませ、三等室を彼が獨占の舞臺とした。

こゝの船客は、大凡三十餘名である。いづれも壯者であるが、半ば永住の目的をもつて南洋へ渡るのである。情感に乏しい人達でも、流石に旅情をそゝられたと見え、皆沈黙して、波の音と尺八の吹奏に心を任せてをる。五燭の電氣燈は力なけに弱い光りをなけ、薄闇い一行の運命を照さうと努めてゐる。それが亦如何にも悲しげである。

彼等は自ら進んで自己の幸福を獲んと企てたのか、或は生活の壓迫に堪へ兼ねて、故國の同胞の列から放り出されたのか。何れにしても闇がりの中を探し廻る人間の正體をまざくと見せてゐるのである。

尺八の音はハタと止んだが、誰も聲を立てる者もない。紙風の絲がフツと切れた

やうに、その音は限りない波の中に消え去つた。そして私には新しい淋しさが襲つて來た。

船の動搖は靜かになつた。誰か甲板で

「あ、下田の燈臺が見える」

と怒鳴る。ハット思つて、船窓から海上を見渡すと、左舷の遙か彼岸に、燦然たる光りは夜の永遠の暗を破つて高く輝いてゐる。私はなんとはなしに両手をついて、その生命の燈を拜した。

いつしか夢におちた。故郷の人達をはつきり夢みた。私の夢はいつも判明してゐる。嘗つて學校にゐた頃「僕は二つの世界をもつてゐる。それは醒めた世界と夢の世界だ。だから三十年生きれば、六十年生きたと同じことだ」といつて笑つたことがあつた。そんなことが想ひ出された。かうした荒海の中に身體があつても、心は自由に別な世界に住むことが出来る。夫が深い神祕のやうに感ぜられる。波は斷へ

間なく右舷に衝つて、鯨波をあける。時々岩にでも衝かるやうな堅いけた、ましい響を立てる。咳拂ひして寝返りをうつた。もう曉も近づいたらしい。前夜の吐瀉先生は頻りに話しかける。

「さうですか、本願寺さんから視察に出掛けるのは、あなたですか。私はあなたのやうな呑氣な旅ではありません」

この男一切々に訥る辯がある。そして其度毎に氣取つたやうな咳拂ひする。一體この男、自分以外のものは皆な呑氣者と心得へてをるらしい。併しそんなことを一々辯解をするのも憶劫である。まづ呑氣者となつて謹聽するにしくはない。

「私は今度半生を嗜して出掛けるのです。是でも故郷には妻子もあります。弟も一人あります。え、備後表のある村落ですが、矢張り大谷派の門徒です。村落は一般に引つ込み思案の者ばかりで、私の今度の企てについては、随分かれこれの非難もありましたが、私は思ひ切つて斷行しました。併し決心するまでは妻子の愛

に牽かれたりなぞして、苦しみました。が、決心して見ると何んでもないです。

行く先ですか。英領のテバウルです。場合によつては、少しある家産もすつかり注ぎこむつもりです。」

そして彼は細かに村落の實狀を語つた。終りに殖民地には第一に宗教、第二に女が必要であることを丁寧に子供に物を教へるやうに聞かして呉れる。

宗教がないと皆の氣が荒くなり、そして國を思ふ心がなくなり、又子供の教育が出来ないつて、向にゐる私の友人が申しました。そして女がをらぬと、矢張りいけないさうです。暖味がないからでせう」

なぞといふ。聞いてゐると際限がない。ものゝ二時間も彼は語つた。兄弟に物語るやうな親しみで、何もかもぶち撒けて語つた。私はその話す事柄よりも、話して呉れる心根が嬉しかつた。見ず知らずの人が二人、一つの船に落ち合つて、漫々たる大海の中に、温い人情を交はすのである。夫が私には不可思議に感ぜられた。「魚

は瀬に住む、鳥は木にとまる。人は情けの中にすむ」とか「旅は道連、世は情」といふやうな、古へから我々の祖先に味はれたことが、今更のやうに噛みしめられる。そして黒い鐵板で堅めたまるで牢獄のやうな、この三等船室が、温い搖籃のやうにも感ぜられる。

夜が明けわたつて、船が東京灣の霧の中を通る時には、その男は深い眠りに落ちてゐた。私は自分の船室へ戻つた。

一八、求めず、諍はず

私達の多くの心配や苦しみは、他人に求むることから起つてをるやうに思はれる。自分といふものに對して、あの人はかうもして呉れさうなものである。あゝもすべきであるといふ風に求めるのである。かうして他人に求めても、他人は自分の求めてゐる百分の一も満たして呉れぬ。そこで他人を憎んだり、怨んだりする。大膽な元氣のよい強い人達は、こんな意口地ない根性を起すことは少いけれども、大抵の人達はこれを繰り返してをるやうに思はれる。強い人でも、抜き差しのならぬ逆境へ陥ると、多くは、弱い人と同じな心を起すやうである。

かやうに求める心は大小様々に分れてゐるが、さて夫が思ふやうにゆかぬ爲めに、怨んだり、嫉んだりすることは、多くは他人の力によつて生活をしやうとする人達

に多いやうである。今の日本にすれば、第一に婦人、第二に力の足らぬ神経質の息子達、次に檀中の厚意によつて衣食してをる寺院の人達といったやうな順序であらうか。

私なども寺へ歸ると、稍もすると、このやうな、さもしい了見になる。或時は人々の親切が足らぬとか、仕打ちがよくないとかと思ひ込み、妙に敵意をもつて、反抗的に「なに他人の厄介にはならぬ。乃公のことは乃公がやる」といつたやうに、焦々した心地になるのである。是はどちらも同じ心の裏表で、底は一つの小さな我利々々の根性である。

求める心があるから求める。又求める心があるから、夫に力瘤を入れて反抗するのである。このどちらでもない處に、私達の眞實の道がある。

或る夜、私は妙な夢を見た。私と其他の五六人の人々が、六尺ばかりも高い臺の上で腰をかけてをると、それが自ら歩いてをるのである。妙な器械だなあと思つて

をつたが、不圖、氣がついて見ると、私も他の五六人の人達も、皆んなが横笛を百本ばかり繩で結んだものに腰をかけてをるのである。まるで多くの竹の切口に腰をおろしてゐるやうに。

その時、私は思ふた。何故百本も笛をもつてゐながら一本でも吹かないのであらう。かう思つてゐる中に、私はじめ五六人の人達は動く臺に運ばれて、里川の端に沿つて行つたり來たりしてゐた。そして夢はさめた。

夢のさめたのは眞夜中で、あたりはしんとして物音一つ聞えぬ。私は吸ひ込まれるやうに、この夢の後を追ひ、そして心に幾度もその夢を繰り返して味ふた。

百本の笛でなくとも、せめて一本の笛を吹いたらどうであるか。一本の笛に満身の息を吹き入れるやうに練習の功をつめば、天地鬼神を感動せしめる好音を出すことは出来る。一管の笛にも、私達の全生命を吹き入ることが出来るのである。然るに私達は百千本の笛を繩にからけて之に腰をかけてをる。そして「この笛は私のも

のだ。乃公の尻の下に据ゑられてゐる」といつて治り返つてをるのであるまいか。私共は、よく何んでも集めて来る。終日人生の曠野をへめぐつて、朝に樹の枝を拾ひ、夕に果實を取り、又は珍寶を探し、高貴な寶も尋ね出す。そして夫をひとまとめにして、「乃公のものぢや」といつて腰をかけてをる。是は強ち事物ばかりではない。家族でも、親類でも師友でも同じことである。私達は稍もすれば、是等の人々を一所にして其上に腰をかけて安心しやうとする。かうした態度といふものは、全く夫等の人達を殺すのである。一管の笛に全力を吹き入れるやうにこの人達の胸の奥に、私共の温い心の思を入れると、皆の人達が、喜んで妙音を出して呉れる。或人は起つて舞うて呉れる。かくて私達は、この世に淨土の眷屬功德、妙聲功德、微妙の莊嚴を拜することが出来るのである。

私達が徒らに他人に求めるのは、百本の笛に腰をかけて「もつと他の樂器を下さ」といつてをるやうなものである。誠に一管を抜いて、明月に吹きすすんで御覽、

そして好い音の出るまで力を盡さうではないか。尙ほ進んで云へば、管に笛ばかりではない。あらゆる樂器は、私達の前に、歌口を揃へ、絃をのべて待つてをる。私達はどれにでも心のまゝに樂を奏でやうではないか。

かやうに與へられたる自分々々の本統の生活に氣がついて見ると、徒らに外物を追ひ、他人に諂ひて自分の望みを満たさうといふやうな根性を起さなくともよいやうになる。私達が一度この求めない心に立ち返ると、心の奥底から、温い嬉しい、そして愉快な、明るい自由の心が湧いてくる。この喜びは、金を貰うて嬉しいとか、衣服を得て嬉しいといふやうな、外から附けたものではなくて、全く不可思議に湧き上る内心の喜びである。その心の中は誠實に満ち、確信にみち、希望に満ちてをる。私は是を如來心であると信じてをる。そして又それは、私の心に焼きついて、ある意味において、私の本統の心とも申してもよい。

兎に角、私が焦々して他人を隔てたり、又は卑屈になつて、金錢名譽を求める時

に私はもう何の價値もない生命もない、尸骸となつてをるのであるが、このやうな淺ましい死滅の淵に沈む時に、私は、靜に我に返り、私の深い心に觸れて救はれることである。私の如來は、常に「そんなことではならぬぞ」といふ警覺を與へて下され、そして其大心海に私を吸ひ込んで下さるやうに感ずる。

大慈悲に觸れた人ならば、何處にどうしてをつてもよいのである。夫として、妻として、嫁として、姑として又は商業、農業、官職にたづさはつてゐても、教師、僧侶、軍人、學生の何れでもよい。「資生産業、皆是佛道」、「汝等の行する所、皆な菩薩の道」である。先師曰く「求めず、諍はず、天下何れの處にか、是より強勝なるものあらんや」、是は眞實心に住した人の叫びであると思ふ。

眞の活動、眞の生活はこれであると思ふ。

一九、信の樹立に就いて

一

いつの時代でも、少數の天分ある人を除いては、ものゝ表面丈にしか觸れ得ないものであるが、この頃の日本の思想界の實狀を見るに及んで、殊に其感を深うせざるを得ない。

哲學界に於いて、オイケンやベルグソンが一時流行したが、夫も多くは一時の好奇心を満足させるか、又は思想の該括的智識を擱む位に止まつて、眞に其等哲學の精髓に徹入すると云つた人は殆んどないやうである。今春以來タゴールが紹介せられ、今更のやうに印度思想の復活を叫んでゐる人もあるが、是も吾々は一時の流行となりはせぬかと案ぜられる。

一體、日本人は昔から地勢上不利の位置にあるので、其國語を同うする國がない爲めに、外來の文明を輸入する時に第一に困難を感じるのは、外國語である。日本人はこの外國語の爲めにどれ程苦しめられたか知れない。儒教や佛教の渡來した以後、苟も學者とか思想家と云はれる人は、皆な漢文學の素養がなければならなかつた。大抵な人は、この漢文の煩瑣な研究の爲めに精力の大部分を費し、もう新しい創作をする前にいきついた。随つて大部分の學者は外國文明の崇拜者となり、傳統者となつて一生を終つた。唯天分ある少數の人達が、この難得の外國語を支配して、そして其中から純なる自己の創作を試みたのである。

維新以來大凡半世紀を経過したが、尙ほ今日になつても、我國民はこの外國語の爲めに苦められてをる。學者といふことは、外國語を知る人といふことになつてゐる。かやうに智識階級が、昔から外國思想の輸入といふことに馴れ切つてゐる爲めに、一般民衆も不知不識、舶來品はよいといふ感じとともに、是等の輸入思想を受

け込むのである。私は思想の一時的流行といふことは、其思想を受け込むにかやうな國民の基調に基くことであると思ふのである。土地に相應せなければ、移植した植物も成長せぬ。稍もすれば江南の橘が江北で枳となるといふ悲劇を繰り返すのである。

夫故に人々は、先づ心靈の地盤を固めねばならぬ。甘味を攝取するにも消化器が健全でなければならぬ。即ち第一に充分噛みしめることである。齒がたゞなくとも努力して噛みしめる。そこから味がでてくる。唯甘さうだといふので丸呑みにすれば、胃腸を傷ひ、延いて身體の全體を弱らすばかりである。其人は身體を傷ひながらも、新しい食物を取ることの誇りや又は先覺者の主張の爲めに、夫を他人に勧めらる。かやうにして徒らに不健全の飽食者を作ることとなる。

尤も數年以來、我國民は、我國思想を消化することには随分馴れて來た。其消化力は著るしい程進んでゐる。十數年以前にニーチェやトルストイが紹介された時代

に比ぶれば、哲學界、藝術界、宗教界の何れに就いて見るも、驚くばかりの進歩を遂げてをる。ニーチェが單なる本能満足主義者として、トルストイが「我懺悔」「我宗教」によつて、單純なる清教徒的基督信奉者として傳へた如きは、其著るしい例であるが、すべて數年前までは、其國狀國民性、歴史又は其當時に於いて勢力ある思想等の背景と連關せず、唯其人の思想文を切離して紹介したものであつた。夫が爲めに夫等の輸入思想は、いつも眞實なパツクの中からけたいな怪物のやうに光りを放つてをつたのである。勿論今日でも我國の事情に疎かつたり、又は心靈上の輕卒者は、常に前と變らぬ盲目的な無批評な態度で輸入思想に臨み、そして、自分の考へに似た思想でもあれば、大に歡喜と崇拜を捧げ、自分の思想に合はぬものがあれば、仇敵のやうに咀つてをる。そして更に不思議な程皮肉なのは、一流の學者、思想家をもつて、自ら任じ他も認めてゐると云はれてゐる人々が、實際、心靈上の深い天地には少しも觸れず、唯あらゆる平面を廻轉し、疾走しつゝあるといふこと

である。即ち理解して智解せず、思辨して體驗せない爲めである。是は虎皮を着る羊、僧衣を纏ふ外道の徒である。そして是は又程度の多少に於いて、あらゆる人々に行亘りうる批評かも知れぬ。自ら深く反省せねばならぬ主要の點である。

二

タゴールばかりでない。凡て印度思想は、其光明の方面丈を見る時は、極端なる貴族主義に陥る。是は多くの信奉者に於いて、常に見る所であるが、殊に宗教的情調に於いて宣傳される時に、此弊を醸すことが多い。

あらゆる心靈の創作者は、よき意味に於いて思想上の貴族となる。そして成功せる資産家が、その息子や親戚を引き立てるやうに、自分のもつてゐる現在の心境を無雜作に頌たうとするのである。否其成功も、自分は多くの艱難を経來つた經驗から、無雜作の授與を信することは出來ないかも知れぬが、少くとも其間に立つ媒介者——それは宣傳者、又は翻譯者の名をもつて呼ばれてをる——は其事を敢てせん

と企てる。かくして遂に人々は、其貴族の眷屬となり了る。即ち其教團に入るのであるが、而も其中心は一つでよい。一の團と呼ばれながら、其圓心は人の數丈を算出せざるを得ない。即ち唯外的の關係を結ぶに過ぎないのである。

かやうに外的關係を早く結ぶことは、宗教文藝に於いて殊に見ることが出来る。何人も刹那の光耀、刹那超證の名の下に、握手するのである。ニーチエなどは此間の消息を皮肉つて、與へるといふことは義務で、受けることは寧ろ慈悲の一つであるなどいふのであらう。云はゞ何んでもないと云ふことを強く云ふたに過ぎないのである。

是といふも、純真なる心靈的建立と困難といふの外はないので、後輩は常に成功者の結果丈を、直ちに握らうとし、成功者は亦此要求に應じて、何等の教養も施さず、直ちに腕のない弟子に極意皆傳を急ぐ。

こゝに心靈上の私通が開始せられ道行が行はれるのである。是は甚だ苦々しい點

である。抑も道は虚にあつまる。道を産まんとする瞬時、或は寧ろ道を受け込まんとする刹那、そこに心靈上の虚が起る。これは至甚至大の力である。此力はあらゆる徳を吸うて止むことはない。即ち道は此虚を慕うて萃るのである。然らば其虚は如何にして作られるのであるか。夫は言葉を換へた丈のものでないかといふ疑問が起る。

元より此點に關しては、過去の聖賢は、あらゆる方法を盡して、解決し表現せんと企てゝゐるのであるが、よしや其目的が充分に達せられても、一般人は常に享樂主義者の手を出して、直ちに其結果を掴まんとあせる爲めに、こゝにも同一の悲劇が繰り返されるを常とする。

併し私はこゝで健全なる信仰の樹立を望んで止まぬものである。其信とは、一面「享樂的情調や思想を正しく批評する」ことでなければならぬ。従來佛敎に云ふ所の貪、瞋、無明、疑、慢、の五鈍使は盲目的の執着であるから、この享樂的思想の

情調である。是は重要な質料である。この質料を精練して心靈の金を採取するの外はない。是を精練するつもりで、實は却つて鏽を持ち出すものは、身見、邊見、邪見、見取見、戒禁取見の五利使である。是等は鋭い見解であるが、實は盲目的執着の口實を造つて、正道を妨げ、眞の批評を滔晦するのである。私がこゝで「享樂的思想情調を正しく批評する」といふたのは、是等の五利使を破斥し去つて、直ちに五鈍使其物の本營を衝くのである。委しく云へば、人生経験を深く積んで、充分に人生の逸樂や、盲執の自覺を感じた時即ち五鈍使五利使が充分に力を開發して、腐爛せるまでに至る場合に於いて、鋭いメスをもつて刺通し割離するのである。是は甚だ困難な事業であるが、併し機縁が熟する時には、不可抗の力をもつて、此難事業を果し遂げる。他力の意義は、こゝに尤も強く體驗せられるのである。

かうした經驗は、生涯に於いて尤も偉大なるものゝ一つに屬するものであるが、此現實の資料に鏤刻せられたる心靈的創造の中に、死の恐怖、傳習の權威、盲目的

の逸樂等の舊來の生活は、尤も明瞭に識味せられてくる。云はゞ潜在の煩惱が顯在し來つて、自分の深く藏してゐる光りを開顯するのである。其時に光りの子は、靈の歌をうたふ。宗教的詩歌、神學、あらゆる藝術は貴族的の色彩をもつて、表現せられ、民衆の崇拜の對象となる。

三

されど心靈上の創作が、貴族的な高踏なものとなると同時に爛熟して死滅する。率都婆小町の末路となり了る。華嚴天台をはじめ、所謂大乘佛教の凋落せるは全く是が爲めである。生活は常に進行しつゝある。唯誠の所謂「恒轉如暴流」である。此生活力は廣くは宇宙の生活力とゞもに轉々止まぬものである。科學的な不可抗力をもつて、儼然として増轉してゐる、この現實的な生活力は無自覺的の強烈をもつて進行しつゝある。シヨペンハウエルは此處を洞察して驚いた哲人の一人である。盲目的意志は能くこの生存競争の恐ろしい世界を産出した。世界は意志の表現

である。彼はこの重くろしい因果の羈絆を脱する藝術の世界を説いたが、この兩者を眞に融會渾一する心靈創作を果し得なかつたやうである。但し夫をもつて此哲人を輕々しく批難してはならない。此哲人は容易に光明世界を建立し得ぬ程に深く暗黒の世界を洞視したのである。私はタゴールといふ人に就いてはまだ研究したことはないから、こゝに論評する資格はないが、若し彼が眞人であるならば、この現實の鐵火を経た人でなければならぬ。そして其光明生活を歌ふ底に常に暗黒を見てゐる人でなければならぬ。「暗室の王」などを讀んでも、多少此點を充してゐるやうであるが、唯一般人は、タゴールとか印度思想とか云へば、もう西洋の物質思想、征伏的思想を離れた純粹な心靈主義であるかのやうに思ふのは、非常なる謬見である。と云はねばならぬ。西洋思想を一概に征伏的、物質的と呼ぶのも、餘りに大擱みな議論である。近世にあつても、スピノーザーやシヨベンハウエルやカントの如きは、深い心靈的創作の天地に進んだ哲人である。其哲學は教なき人に解せらるべきでない。

い。よしや理解せられても、其哲學を體現することは容易なことではない。善惡を超越して、力の萬能を叫んだニーチエなども幾分時代の傳習に反抗する奇矯な譏りは免れ得ないとするも、人性の祕奥を熟視して、深く現實生活の根本に徹入し、其暗黒界より擱み來つた創作魂をもつて、力ある人生批評を加へたこと丈は慥かである。故に彼をもつて徒に武斷主義者としてはならぬ。あの力を崇拜する底に萬斛の涙があるのである。或は眞の涙の味は力の崇拜者にのみ許された特權であるかも知れない。

この意味に於いて、世親菩薩が唯識論に於いて、第七識の我執と恒審思量を説いて、迷妄生活の根元としたのは、深刻なる人生批評と云はねばならぬ。粗朴な人々でも無自覺的な烈しい性の鬭争がある。即ち存在を堵して迄も争はんとしてゐるのである。是は家庭の上などに於いて殊に鮮かである。私の知人が而立を超えて三四人の子供をもつてゐるにも係らず、思ひ出したやうに放蕩し出して二年間の中に身

代を蕩盡して誰も其理由を知らなかつた。然るによく聞いて見ると、長い獨身生活をした伶俐な善良な母が其基因をなしてゐるのである。母は烈しく夫婦の間を嫉妬して、息子の精神の基調を毀した。息子は妻の愛の要求と、母の愛の要求の中間に苦められて、遊里に避難したのである。そして彼に取つての避難は、現實世界には墮落であり破産であり、一家の離散であつた。そして其母も嫁も主人も伶俐な善良な人達であつた。

是種の出來事は、數ふるに遑あらずである。或者は是をもつて、家族制度の弊害であると論じ、他の或者は、その人々の人格上の缺點を非難するのであるが、慎重に是等の事件を思考し來る時は、そこに殆んど運命的の不可抗力が潜んでゐるのである。これ等現實の資料は、容易なるローマンスによつて溶融轉化せらるべきものではない。少くとも決死的の靈的戰闘を試みなければならぬ。それは思索してもよい。絶對者に歸依信頼するも宜しい。又一々の情趣を誠實に再思再味するも宜しい。

い。即ち夫等の動亂によつて吾々は信念の建立を見るのである。

信念の樹立は、かくの如く困難なものであるが、併し人生の意義を誠實に考へ永遠の希望に憧れる人ならば、どうしても此信念を樹立せねばならぬ。科學は人生々活に必須なものであるが、夫は唯資料を供給するのみにして、其等の資料を消化する靈的能力を與へない。哲學や文藝等も、其人の態度によつては、矢張り科學と等しく智識と情感の奴隸となつて、徒らに不消化の資料に面接して強迫せられるばかりである。眞に自己の生活に沈潜し、常に心靈の要求に耳傾ける人は、どうしても信念の樹立に急がねばならぬ。眞の宗教とは是より外はない。

二〇心の閨

信仰は私どもの最後の秘密である。何人も入ることを許さぬ、亦入ることの出来ぬ心の閨である。私の心の閨である。この閨が私の憩ふ所、私の隠れ家、また私の元氣の源、生命の本である。それで信仰のことは、それがほんの表面丈ならばいざ知らず、その本質はどうしても皆の人の前に打ち出すことは出来ぬ。よしや打ち出した所が、ほんとうの甘味は、只其人丈が味はれるので、外の人達は、これによつて自分々々の信仰に立ち返る丈のことと思ふ。

世界には十五億萬の人達がゐる。殊に私共の國は榮えて賑かである。私達は、多くの人達と手を取つて愉快に日暮が出来る。併しこの中で、私の親しい人々は僅の數に限られてゐる。私の知人、私の師友、私の親族、更に私がこれ等の人達に向ひ

て、最も打ち込んでしんみりした話をする時は、その中のたつた一人である。知人の中の一人、家族の中の一人、師友の中の一人、私はこの一人の人と親しく水入らずの話が出来る。この時は世界の中で唯二人である。多くの人達は私共二人の間に消え失せてしまふ。私の心と、其人の心は、互に行き通うて一心の趣がある。天地は唯一心となる、平生の薄つべらな笑ひをして物語つてゐる私ではなくして、深い私が出てゐる。大切に秘しておいた私といふものが表はれてゐる。私はこの深い私の姿の對手の上に眺めて、なつかしく感ずるのである。

併し私は、どうも是丈で満足は出来ぬ。私は尙ほ深く進んで、私一人を懐く、最後の一人として撰んだ人に對しても、私の心は矢張り孤獨である、私はこの人に向つても、心の全分を出してはをらぬ。否、全分どころか、ほんの僅の一部分しか出してをらぬ。私の内部には、依然として一人の私ををるばかりである。そして私は唯淋しい、唯頼りない、唯暗い。

琴の譜は、外曲と内曲の二つに別れてゐると聞いてゐる、外曲は他の樂器に合はせられる音曲で、内曲は唯琴夫自身の曲譜で、他の樂器に合せることの出来ぬものであると云ふ。私は嘗つてこの話を或人から聞いた時に、上の心持で受け取り、思はず快心の聲を洩したが、次の瞬間には、淋しい氣分となつた。私といふ心の琴の内曲は、唯私自身である。私は獨り私の無絃の琴を弾するだけである。その音は悲痛である。凄愴である。眞に堪へ難い孤獨の曲である。人に合はず曲にはわびしさ頼りなさ泣くこともあるけれども、そこには未だ餘裕がある。二人で泣くといふ餘裕がある。然るに私の深い本音、深い曲は唯一人の調である。聞き手のない、唯聞かせ手丈の哀れな曲である、その音は涯のない荒野の末に消え入るので、そして空洞とした恐ろしい反響をもつて私の心を戦かせる。私は奏づる音よりもこの反響に慄える。唐の善導大師は、この孤獨の境地に目覺めて泣かれた一人である。あらゆるものに強迫せられた大師は、その心持ちを二河喻に象徴された。大師は「無人

空曠」と叫ばれた。世界には十數億の人々がをるけれども、大師は唯一人であつた。深い自分の心に眼が覺めて見ると、良に空曠なる三界の巷に唯獨りゐるのである。何處にゆき、何處を求めやうぞ、雨に濡れ、風に吹かるゝ順禮のやうに、とほくとあてどもなく辿りゆく心である。大師はこの空曠なる孤獨の世界に慄かれた。

古も今も、そして新しい男女も、古い人達、博士達も、榮華に時めく人々も、一度この本心の曲を聞く人は戰慄かねばならぬ。淋しくとも、悲しくとも其聲は私のなつかしい聲である。どうしても捨てることの出来ぬ私の血の聲である。私の生命そのものである、硬い心の殻を破つて出でた生身の聲である。あゝこの生身の聲、この聲は私の生活の全體を投げ出して始めて聞く聲である。

されど此聲を聞いて救はれぬものは一人もない、この聲は私全體をあけて、純一に親を求むる聲である。この全體をあけた心は、そのまま、如來の喚聲である。「歸命といふは、本願招喚の勅命なり」。純一に纏めた心は、親の心である。私はこの眞

獨の天地に眼覺める時に於いて、救はれる。

何處の國にもよく見うけることであるが、大な嚴めしい社の裏に怪し氣な小さな社がある。その後更に更にその後だん／＼に小さい社があるものである。この頃福園の西公園の社に詣で、この遺憾なき典型を見た。眼を驚かすやうな宏壯な社の裏手にだん／＼に小さい三つの怪し氣な社がある。そしてそれ相應に安つほい繪馬だの、雨ににぢんだ白旗赤旗可愛い鳥居などが供へられてある。私はこゝに深い人間の祕密を見る氣がして、更に自分の内心を考へたことである。人間は決して共同の社丈で満足するものでない。だん／＼に狭い深い心を捧げる社が要る。かくして人は、最後に自分一人となる。そして一人の心の憩ふ園を求めらる。

私の信仰は私一人の心の園である。最後の園である。此園が暗くとも明くとも、又悲喜何れにしても。そして狭くて廣く、廣くて而も狭い私の新なる天地である。私はこゝに久遠の私に對面する、御親に、心靈の親に、なつかしい御親に。

二二、人生の熱愛者

—— I 師を弔す ——

I 師は、遂に逝くなられた。私に取つてはあわたゞしい訣れである。そして手紙と師友の言葉丈で、實際師の病床を訪れる機會のなかつた私は、逝くなられた報を手にした驚きの外は、どうも逝くなられたとは思はれない。九州漫遊の歸途京都に師を訪ひ、終焉の十日ばかり前に描かれた、師自身の終焉の想像圖を見た。一見鬼氣人に迫る筆つきである。

橋上に病みほけた病人が、死と罪惡の恐怖に慄えながら、兩手をあけて何物かに縋り付かうとしてゐる。橋の下からは、異形の鬼が三疋、各兩手を差し延して、橋上の病人を引きづり落す勢を示し、病人の背後には、佛菩薩が、矜哀の御手を垂れ

て、病人を懐かうとしてゐる。薄墨でなぐり書きしたものであるが、ちやうど鳥羽僧正の繪のやうに、活々と見る人の骨に迫るやうな繪畫である。畫の向つて右の下方に「吾死す時將に斯の如し」と書いてある。

私はこの畫をじつと見まもつた。なんとも云ひ得ない一種の戰慄を感じた。その畫が私に迫ると云ふよりも、I師の魂が、私の魂をしつかりと抱きしめたやうな苦しさを感じたのである。師の肉體と、この一片の繪畫と、どれ程の相違があらう。肉體に宿る師の魂、師はあわたくしくも消え行く肉體をこゝへ移して、第二の肉體を創作せられたのでないか。長い胃癌の苦みに悩みながら、あらゆる精力を絞つてこの畫を描かれた。描かれたと云ふよりは、自己の魂を吐き出されたのである。平和な弛緩した心でなしに、深い自我の最高調を象徴し、その瞬時の深烈なる魂を、第二の自己としてこの一片の上に表現せられたのである。私は活ける師に對面して感ずる心持ち以上の強さを以つて、改めてこの畫に對面した。そして師が生涯の努

力と、奮闘を回想して、涙の頬に落つるを禁じ得なかつた。

二

私のこれまで逢うた人の中で、I師程自然の魂をもつた人は罕である。師は始めから人爲の虚飾に煩はされる人ではなかつた。師は始めから終りまで、動的の人であつた。人のことはかまわずに、思ふことをどしどしやる人であつた。先輩がどうだの、友達がどうだのと、こせくする人でなかつた。是が爲めに、随分御自身の畏敬してゐる先輩にも迷惑をかけたことは一と通りではなかつた。併し師を知れる先輩も友人も、迷惑を蒙りながらも師の跡始末をつける勢力を吝まなかつた。そして師は、能く其敵を面罵し、痛責し、完膚なからしめた。其咆哮し怒號する態は、阿修羅王の荒れるやうに、大つびらで堂々たるものであつた。

しかしかやうに思ふ所を行ひ、云ひたいことを怒號しながら、師は一般に知人から善意を以つて迎へられた。是と云ふも、師の自然の魂の力である。師の胸には側

の氣兼ねや妥協的の氣分がなかつた。師の心境は開拓せられない曠野のやうなもので、そこに師の魂は獅子のやうに、自由に馳けまはつた。師の魂は形式的の拘束を受けるには、餘りに無邪氣であつた。そしてあまりに大膽であつた。師はニーチェの所謂精神の三變態の中、第一の駱駝でなく、第二の獅子と、第三の小兒であつた。師の魂は獅子のやうな劫奪を擅にし、小兒のやうに無邪氣に遊戯した。獅子と小兒とは、誠に自然の具體化である。獅子は雄大に吼え、小兒は天真爛漫に遊ぶ。前者は奮闘の魂であり、後者は常に萬物の端緒である。獅子は小兒を魂として怒號し、小兒は獅子の雄々しさを孕んで遊ぶ。我I師は、かやうな人であつた。

Iさんは野性の人であつた。政治家としても、周圍に媚を賣るやうな所謂官僚派に屬することの出来ない人である。一時は高閣に上つても、忽ちに迂り落ちて、終生在野に怒號せねばならぬ人である。そして師はこの通りにして一生を送られた。

三

獅子と小兒の魂しか持つ事の出来なかつた師は、終生悟り澄すことは出来なかつた。常に健闘し、常に勇奮した。學校にあつてはI師とともにストライキの隊長となつて先輩を手古摺せ、延いて二十九年の本山改革事件眞宗大學の移轉にも盡瘁し、臺灣の布教、朝鮮、支那の視察等にも、常に雄圖を胸に懷いて到る處劃策し奮闘せられた。遂に全生涯を失脚して、故山に歸臥せられたが、矢張り安閑としてはゐられなかつた。

この故山に歸臥した時に、師の精神の轉化について面白い話がある。これは先年御遠忌の際、京都の市會議事堂に、師自ら公衆に語られた逸話である。

越前のあの山の多い田舎寺へ歸ると、師は獨り思つた。どうも説教といふものは六ヶしいものだ。自分勝手なことを云へば異安心と云はれる。御相承通りにゆけば、型へ箆つて死んで仕舞ふ。よし説教はよさうと思つた。その後は決して説教はせない。或時其村の青年會に招聘せられて講演を試みた。そして話の了つた夜、村

の人達に、何ぞ面白い話がないかと聞くと、人々の語るには、此村は五十年前までは、年々日を定めて鎮守の社に幼子を供へた。所謂人身御供と云ふものである。是は昔からの習慣でこれを供へなければ、神の怒りに觸れて、作物が荒らされると云ふのである。夜營の晩、籤引かなぞで當てられた家の母は、三四歳になる愛子を背負つて、村中を戸毎に訪れて、子の一生の暇乞ひをする、そして哀しい歌を、人々とともに歌ふ。

親子の訣れ、乳たんとのましよ……

とやらの涙の歌をうたふ。そして一門の人々と里の人達は悲しい運命の下に、泣いて年毎に一人の子を神に供へたといふ。或年一人の勇ましい武士が来て、どうしても退治したいと云ひ、遂に里の人を説き伏せ、九尺柄の槍を提げて鎮守の社へ上つた。社は山村に能く見うけられる數百段の石段の上に建てられ、老樹は蔭森として四邊を鎖して居る。武士は拜殿の前を流れる小川を隔てた藪影に身を潜めた。村の

人達は恐るゝ子を入れた箱を拜殿に供へて、合圖を約して遁けるやうに歸つた。夜は蔭森として更け、この時全村は凡ての火を消した。天地は全く妖氣に包まれた。すると妖怪は裏の樹立から、のそくと拜殿に近いた。武士は槍を構へた。彼はそれとも知らずに、子を入れた箱に手をかけ、二三度かたこと動かした。幼子は母に訣れた悲しさに悲鳴をあげた刹那、武士は小川を跳ね越えながら、槍をしごいて妖怪の太腹を腕も通れと刺し殺した、そして大聲を發して里人に合圖した。村の人はこの状態を見て且つ喜び且つ怒つて、件の怪物を散々に踏にじつた、「孫の敵」「子の敵」といふ叫びは物凄くあたりの木立に響き、夜の沈黙を破つた。妖怪は年經た貉であつたとやら。

其後、村は平穏となり、魔神の恐れは去つた。今も夜宮の晩は母が子を負うて、「乳たんとのましよ」と歌をうたふ儀式が残つてゐると長物語りした。

師はこの話を聞いて、其夜曉方まで泣き明した。あゝ其貉は誰であるか、このI

でないか。乃公はこの大きな圖體をして、毎日寺にのさばつて、たらふく飯をたべてゐる。誰が乃公のやうな奴に、金錢、衣米を供へるか。彼等は粒々辛苦の血や汗を絞つたものを何んでこの乃公のやうな説教も出来ぬ横着坊主に捧げやうぞ。彼等は昔の習慣により、又乃公にあべられるのを恐がつて如來様に供へるのだ。夫を乃公は何んとも思はずに、掴んでたべる。あの神様に供へたものをたべるのと何の相違がある。さうだ、乃公は當然武士に仕止められる運命をもつてゐる貉であるのだ。

師は此熾烈な内省によつて、自己の革命を感じた。そして今迄四度路になつてゐた自我の統一を感じた。如來と救済と、罪惡の自我の渾一を感じた。かくして殆んど十年に亘る歳月を通じて、草鞋ばきの傳道を試みた。

良にこのありふれた昔物語りは、師の全身を焼く靈火であつた。師はこの靈火に燃えつゝ十年の奮闘を續けた。そして一日も安逸を食ふことがなかつた。師の胸に

活躍する靈我は倦怠を許さず、常に鞭撻し、常に生命と溢れ出で、勇進の途に師を驅つた。

四

或時、師は數里を隔てた某寺に招聘せられた。寺に入ると、講師たる自分を法中の僧席に混ぜ、而も末座に誰じた。師は此冷遇の理由を看破した。夫は寺格によつて定めたのである、豪氣の師は直ちに歸らうとしたが、不圖故楠潜龍講師のかゝれた額に眼がついた。「介然として其尊に居る」と漢文で書いてある。文意は外界の如何に係らず獨り自ら尊い位地に安するの謂ひである。師は電氣に撲れるやうに此文に撲れて、直ちに高座に上り、此時の感想を残らず、公衆に打ち明け、直ちに家に歸つた。人々はこの電氣のやうな烈しい威風に撲れて、爾來禮を厚うして、師を請ずるを常とした。斯の如く師の布教は矢張り獅子の如く大膽に豪爽に亦大びらであつた。

五

或年の春から夏へかけて、私は常に師と事と志を共にした。師はいつも一尺七八寸の如意を握つて、或時は机を叩いて痛論し或時は磨きながら談論せられた。今私はその如意をS師から譲られて毎日磨いてゐる、そして其如意に連關する師のさまざまな奇行や奇抜の言を想ひ出して獨りで笑ひを禁じ得ないのである。實に師の警告は、天來のものであつた。其迅速に人の言葉の裏を返し、眞を剔羅し痛棒を加へることは、電光のやうであつた。大抵の人は、此峻嚴の鋒に眼眩みて、うろくするばかりであつた。そして其言葉は醜穢と深刻に滿されてあつた。而も其一句々々は、人格の壁を碎き、事件の中心點を壞らすにはおかなかつた。公の會議の時、人々が皆眞面目な顔をして腦漿を絞つてゐる最中に、師は突如として、例の割るやうな醜穢の而も動きの取れぬ譬喩をもつて、問題の眞相を適合して、人々に腹を抱えて笑はしめた。その有様は獅子の吼えるよりも、やんちや小僧の駄々のやうなもの

であつた。そして此駄々が怒號となり、怒號は又一轉して、小僧式の駄々となる。變幻出沒測るべからざるの機鋒を藏してゐた。

今年の春、發病して仆れられるや、多くの人達が見舞はれた。K君がゆかれた時、師は「俺は始めこの寺を普通に立派なものにしようとしたが駄目、そこで學者にならうとして、研究院までやつたがそれも駄目、次に本山に入つて一つ大いにやろうとしたが、夫も思ふやうにゆかぬ。臺灣や朝鮮の方へも發展したが、それも遂に失脚した。そこで十年間草鞋ばきで此地方に傳道した。これがせめても私の慰めである、乃公はもうやりたい事をやつて來たから遺憾のことはないが唯妻子の愛著には泣かざるを得んぢや」と云はれたさうである、A師がゆかれた時「先きは眞暗ぢや。妻子の愛著にはひかされる、併し如來は有難い、どうか本山のことを頼む、やつてくれ給へ」

と云はれたさうである。師の頭からどうしても離れることの出来なかつたのは、大

谷派本山であつた。師は又病を侵して長い手紙をかゝれた、誰の見舞状にも直ちに長い感謝状をかゝれた。言々肺腑より出で、卒讀するに堪へなかつた。そして揮毫し、談論し、苦悶し、歡喜し、どこ迄も獅子と小兒の魂を懷いて生活せられた。

師は實に天賦の個性尊重者であつた。そして勇進者であつた。主義と云ふやうなことを口にするを要せぬ體現者であつた。多く叫ぶものは、却つて其反對を示すことが往々ある。私はこの叫ばずして體現した師を、尊敬せざるを得ぬ、そして自ら省みて慚愧に堪へぬ、師は妥協的な、虚飾な道德家ではなかつた、そんなコンギンヨナルの道德は、一度も師を煩はすことが出来なかつた。其代り師には眞情流露の道德があつた。朴素的な、元始的な、野性な、眞率な道德魂があつた。私は昨年、師がS師に對し實兄に對するやうな、又實父に對するやうに甘へつゝ慕はれた友情に接して、時々涙を催さしめられた。この頃、S師に其事を話すと

「どういふものか年昨から私を慕ひ出しました、矢張り永訣が近づいたせいかも知

れぬ」と云はれた。

私が殊に師に感動するのは、鋭い内省力をもつてゐられた點である。師が嘗て京都に遊蕩してゐる時、S師は郷里にあつて其事を戒むる手紙を送られた。師はこの手紙に接して殆んど三日間、慚愧の涙を絞られたことである。かくの如き敏感な師は、遂に眞の宗教に歸入せずにはをられなかつた。師が道を説くや熱涙潜々として頬に傳ふを常とせられた。師は何事に對しても全我をあけて當面せられた。恰も獅子が兎を搏つ時も全身的に奮躍するやうなものである。

六

或歳の春、私は初めて師を越前の自坊に訪れた。幾度も蕃山の麓を傳ひ、里川に沿ひ、汗を流しつゝ、漸く行き着いた。本堂も庫裏も、境内も、粗大な明け放しで、師の人格其まゝの趣があつた。私が着いて一時間ばかりにして、師は法要から歸られた。出山の釋迦のやうな風傘をして、此如來を提けて、夢みるやうな眼をして石

段を上つてこられた。山寺の主僧と云ふよりは、三國史に表はれた支那の豪傑の佛を備へてをられると思つた。今もその姿が眼先にちらつく。

私の眼に映じた師は、實に生れながらの人生の熱愛者であつた。大膽に人生に當面し、眞摯に死に當面し、面もふらず勇進せられた靈界の勇者であつた。私は此眞實なる自己に眼覺めたる一人、堂々たる此忠實者を、心から敬愛と、讚美と同感の情を以て、哀悼するのである。

二二一、提婆達多の宗教

古から宗教の神祕に徹した人達の、其心靈的表現は、種々なる様式を取つてをるが、我提婆達多の如きは、最も奇異なる宗教的形式を表はした一人であると思ふ、提婆は、事の成行から釋尊を當面の敵として戦ひ、三度まで釋尊を害せんと企てたが事成らず、最後に彼は輿に乗つて祇園精舎へ赴き、表面は謝罪を装うたが、實は十指の爪に劇毒を塗つて、稽首作禮の時、釋尊の御足を引つ搔かんとしたのであつた。諸比丘は暗に是を知つてか、頻りに釋尊の御身を氣遣ひ、中に青くなつて心配したのもあつたが、釋尊は靜に「提婆は今日、我顔を見ることは出来ぬであらう」と諸比丘を制せられた。此時、提婆は祇園精舎に近き、とある木の下に憩ふやうな様子であつたが、見る／＼提婆の立つてゐる大地は炎と燃え上り、二つの金挺は彼

の前後左右を確と挟んで、そのまゝグツト大阿鼻地獄へ引つ込んだ、この一刹那、彼は峻烈な刑罰に慄いて、「南無佛」と稱する暇なく、唯「南無」の言を残して沈んだといふのである。

以上は多くの經典傳説の記載する所である。墮獄の一刹那、「南無」と稱して沈んだといふ所に、稍もすれば賢い人の心からも看過せられんとする程の幽微な、併しながら強烈な宗教的神祕が潜んでをるのである。

提婆の末路が、かうした文字通りの凄惨なものであつたかは、こゝの問題ではない、あそこで提婆の肉身の死不死といふことは、宗教上には大した問題ではない、あそこは云ふ迄もなく提婆の行きつまつた主觀を有効に象徴したものに外ならぬと思ふ。あの時の周囲の事情を思ふと、提婆は阿闍世王といふ外護者を失ひ、一般民衆の嘲罵憎惡の的となり、境遇としては全く行きつまつたのである。賢者は、いかに境遇の壓迫があつても、心に自由の大天地を有つて悠々としてをるが、愚人の心

は、境遇の行きつまるといふにも心も行きつまる。順境の提婆は自己を恃む力があると思つてをつたのであらうが、さて愈逆境に處して見ると、全く自分を持つる力がない。唯あるものは、狂暴の野獸性のみである。順境には猫のやうに優しいこの愚人の魂は、逆境に處すると、殘虐虎より烈しいものであつた。この野獸性は、人を嘔む前に自分を嘔む。自分の優しい感情の少女や、美はしい智慧の少年を嘔み殺してしまふ。心は血醒く、荒れ果て、虐殺者の庭となつてしまふ。これは誠に恐しい死滅である。この死滅の餘波が、偶もある關係を有する周圍に向けられるばかりである。

最後の一撃を釋尊に試みやうとするときに、提婆の足下の大地が炎と燃え上つて、二つの金挺で挟まれたといふは、何んといふ凄惨な、心の象徴であらう。他人を燒かんとする瞋恚の炎は、他人を燒く前に先づ我身を焦す。この意味に於いて、先づ自己を殺さずして、他人を殺しうる人は一人もない。釋尊を殺さんとした提婆は、

思ひきや、自分を殺しつゝあつたのである。是は驚くべき事柄である。併し、心靈上には、最も平凡なものである。提婆はあの一刹那まで、釋尊を殺すことばかり考へてゐた。そして夫は自己を殺さずして釋尊を殺しうると考へたからである。然るにあの瞬間には、自己の死に氣が付いた。即ち今まで自分は自分に對して最も横暴なる殘虐者であつたことに驚いたのである。不思議にも、その驚きの瞬間に、自己の死が實現せられた。否死の現實を初めて自覺したのである。

私は、こゝに一種幽微な、心靈上の驚異に接するのである。それは、眞の死とは、死の自覺者にのみあるといふことである。常識の死は肉體であつて、是に對しては、唯淺薄な動物的の恐れだけであるが、眞の自覺は、どうしても、眞の生命、宗教の第一義的生命を生ますにおかぬものである。常識的に云へば、提婆はあの場合、自己の死を自覺せない方が、仕合せであつたと云へるであらう。自己に徹しなければ、死の眞の恐怖はない。彼はどこまでも釋尊に反抗して、自己の立場をもつていつた

に相違ない。衆人の多くは、少しでも自分より、高い心靈上の國に入ることが出来ないから、彼等にあつては、釋尊も提婆も特別の異りはないのである。彼等は只輿論に従つて盲動するばかりである。故に是等の人達の一部を味方に引き入れることは、何んでもないのである。この態度でゆくならば、提婆は屹度教界の一方の雄者として釋尊と相對し、後の傳記者も、恐くは彼の獨立に同情して、相應な尊敬を拂ひ、少くとも其教團の一部の模様ぐらゐるを後世に残したに相違ないのである。

然るに彼は常識的には、最も損失と見ゆる自己の死を自覺した。彼が生涯をあけての未洗練、未解決の主觀は、そこに軍艦の爆沈のやうな凄慘の破壊を表はさなければならなかつた。この事あつて以來、ものゝ表面をしか見ることの出来ない後世の人達は、彼を目して大逆無道、反逆者、背教者として、あらゆる惡語を浴びせかけても尙飽足らぬといふ有様である。この意味に於いて、彼は最後の土依際に於いて、取り返しのつかぬ間一髪の誤りをしたと云はねばならぬ。

されど是は一般常識者の謬れる見解の一つに過ぎない、提婆の破滅を來すべき自覺は、全く不可思議力の實現に外ならないのである。彼は反逆の真中——あの時自覺せなければ、尙ほいつ迄も彼の反逆は續いたに相違ないから——に於いて、忽然として天雷に撲れたやうに自己の主觀の空虚、血腥い無生命の殘骸に觸れたのである。そしてその瞬間に、彼の刑罰、彼の地獄が實現したのである。それは心靈上の神祕である。眞の地獄は、徒に恐怖する概念の固執者には實現せずして、忽然として自己に徹する直觀者の前に現はれることである。私はこゝに輕々しく業報を口にする人達の謬見を訂さねばならぬ。多くの人は——彼等が常識の立場にある爲めに——業報業報と口に云ひながら、それは彼等に取つては、運命と同意義に取られてをるのである。そこには唯詠嘆的な生温い嗟嘆があるばかりで、緊張した生命の呻吟がない。眞の業報感とは、いま、でもつて來た古い全我の破壊に對する戰慄である。他を見る餘裕のない、他を怨む暇のない、或は寧ろ是まで他に向いてをつた心

が、自己に歸つて解體する刹那の直觀である。それを象徴したのが、あの提婆の墮獄である。

かやうにして提婆は眞の自己に觸れたのである。そして夫と同時に、彼は彼一人の神祕的宗教を創作したのである。「南無佛」と稱する暇なく、「南無」と稱したといふ刹那超越成佛の宗教を實現したのである。是は誠に表面より見れば奇異なる様式を取つた宗教と云はねばならぬ。併しながら、私はこゝに世界人類の初期に現はれたる天才の宗教、或る意味に於いて凡人の宗教の實現を見るのである。

眞の生命の道には、空間的の時間といふことは問題にならぬとは、東西の哲人の一致する所である。提婆は七十餘歳まで眞の生命を得ず、晩年には千古の偉聖たる釋尊に反逆を企てたのである。而も其自覺の一刹那に於いて、釋尊の内祕に觸れたのである。「南無」とは、彼の全我の根柢より振ひ起つた歸命である。これは眞の力、眞の生命、眞の大慈悲、畢竟大涅槃が、人格的に活躍した所である。佛凡一體

となつて、全法界を一心に還源し、刹那に生死海を超越した表徴である。是は實に釋尊の大悟境そのものと根柢を一にしてゐる。

經典の表面では、提婆はあのみ、墮獄したとあるが、併し上述の意味に於いて、眞の地獄を有する提婆は眞に救濟せられ、解脱し了つたのであると云はねばならぬ。「増一阿含經」には、明に之を暗示してゐる。尊者目連は、提婆が南無と稱して墮獄した爲めに、釋尊から一劫の後成佛するであらうといふ記別（豫言）を受けたことを聞いて、彼は神通をもつて地獄に赴き、提婆にこの趣きを語ると、提婆は躍り上つて喜び、我は地獄にあつて、一劫を経るとも其福音を聞いた上は、少しも苦しみと思はぬと叫んだと記載されてある。是れは道に徹した人の共通なる愉悅の語である。阿闍世王も道に入るや、「我もし衆生の悪心を破ることが出来るならば、無間地獄にあつて、無量永却の間苦みを受けても決して苦みと思はぬ」と叫んだ。これはそのまゝ、「諸苦毒中、我行精進、忍終不悔」の大慈心ではないか。經典の記載

は間歇的に長たらしいものであるが、それは一念の自覺を表現したものに外ならぬと思ふ。

かやうにして反逆の提婆は救濟せられた。眞生命の體現者として、不可思議境の一員となつた。釋尊を始め、多くの弟子達の行き届いた生活の整齊と、繼續的な内部生命の偉大なる諧調の國に到達した。肉の提婆はその時か、或はあの時後僅かにして終つたことであらうが、爾來幾十世紀の間、心靈の流れに參與する人達には、解し難い謎として生き残つた。彼の魂は、なんととはなしに釋尊に赴く人達の心を壓迫し、又は牽引するのである。そして其謎を解かんことを要求するのである。

提婆の宗教は、今日更に新しい各種の様式の下に、その温雅豊麗なる内容を盛つて、萬人の胸に復活せんとしつゝあるのであるまいか。

二三、心を映す鏡

支那の或賢者は、自分の眼が一番に近い自分の顔を見ることが出来ないのは、如何にも残念であると云はれた。是は何んでもないことのやうであるが、深い所へ氣がついたのであると思ふ。

他人の顔を見る場合には、盲人でない限り何も六ヶしいことはない。眼をあければ何百人でも一度に見ることが出来るが、さて尤も手近い自分の顔となると、直接には絶対に見ることは出来ない。どうしても一つの方便が要る。それは鏡が要るのである。鏡の面が凹凸でない限りは、各自の顔を正直に映つてくれる。即ちその映つた顔を自分の顔であると承認するのである。その映つた顔が氣に入つて居らうと居るまいと、鏡は何の頓着もなしに映してくれる。だから昔から鏡は正直といふ

ことを表はしてゐると云はれてゐる。

併し或醜婦が鏡に映つた自分の顔が餘りに醜いので、是は真正の自分の顔ではない、鏡の面が悪いのであると、鏡をこはしたといふ話もある。見る鏡もくゝ醜い顔を映すので、鏡を壊はして仕舞ひ、自分をもつとくゝ美しいものだと思ひ込んでをれば安心な譯であらうが、中々さうはゆかぬ。他の人と一所に一つの鏡に映し、さて映つた他人の顔と實際の顔とを比べて見て、間違ひがないとすれば、鏡に映つてゐる自分の顔も眞物と等しいものだと思つて承認を與へなければなるまい。かうして方法を用ゐて、人は常に鏡を正直と信じ、従つて映る姿は實際と相違してをらぬと認めざるを得ないのだ。

吾々は自分の顔を直接に見る力をもつてゐないやうに、吾々は亦自分の心をも、恐らく直接に見得る人は少いであらう。自分の心の姿はどのやうであるか、何が自分の心の正體であるか、少し考へてくると薩張りわからなくなつて仕舞う。恐らく

多くの人々は、自分といふものは、解つたものゝやうに心得て、こんなことを取り立て、考へることも思ふこともないであらうと思はれる。自分の心ほど、自分に親しいものはない。一寸考へれば、自分の心は判然わかつてゐるやうに思はれるが、さて少し落ち付いて考へてみると、何が自分だやら、どの時の心が自分であるやら頓と解らなくなる。朝に機嫌が好かつたのが、午後に氣色が悪くて腹が立つ、どつちの心が自分の正體であらうか。子を愛し、妻を愛するのが自分の正體か、金が欲しい、道ならぬことでもやつて見たいといふ心が正體か、どれがほんとうの自分であらうか。時には正義人道をもつて、世の様々の出来事を憤慨するが、さていろいろと情實を聞かされたり、頼まれたりすると、さう義理ばかりも立て、居れず、事情已むを得ないとか、情狀酌量といつたやうに妥協もする。どれが自分の本性であらうか。或る場合にはものに情けも施し、善心も起すが、或る時には随分、焦々と腹を立て、残忍なことを考へ、残忍のことも仕兼ねないといふ有様である。夜の思

ひ、晝の心、朝の氣持、夕べの感じ、様々起る心の何れが本性であるかと考へてくると、自分ながら雲を掴むやうな嘆を洩すの外はない。それ等のどれといふこともないが、それ等を集めたものが、自分の本性だとすると、餘りに亂雑で、片敷の色合ひの如く、見方によりて色々變るから、結局解らぬといふの外はない。

何故かやうに、一番手近い自分が解らないのであるかといふと、これは、見るものと、見られるものゝ間に愛着が絡るからである。これに關して手近い例をあけると、多くの御醫者さんは、自分の關係の深いもの、即ち自分の妻や子を實の如くに診斷みだてすることは出来ないといはれる。少し容態が好くないと、極端に悪いやうに思ひ込み、少し宜しくなると非常によいやうに感ずる。此間の調節がとれない。況んやそれが御自身の病氣となると、全くこの極端の例であるから、頓と見當がつかぬ。之に反して他人の病氣になると、利害關係も愛情關係も薄いので、冷靜にありのままの診斷みだてが出来る。前者の場合には愛着が絡り、庇護おほいだてが烈しいので、却つて見る眼

が眩んで仕舞ふのである。

かやうに自分の心を見ることには、様々の困難が伴ひ、故障が起るので、多くの人々は、ともすると一生涯の間、自分の顔を見ないやうに自分の心の姿も見ないで仕舞ふやうなことが往々あることである。その癖他人の心に對すると、一樣に賢明で、村の中でも、町内の中でも、どこの誰某はどういふ人物で、どういふ缺點があつて、癖があつて、どんな人物であるといふことは、殆んど云ひ合はせたやうに正札を付けておく。而も他人に對しては極めて明敏に正札をつける各人が自分のことになる一向無頓着で、愚かで、他人のつけた正札を一向に知らず在る。この結果はお互に揚足の取りあひといふことになつて、他人の缺點ばかりを探してゐるといふことになる。世に是程、はつきりと馬鹿らしいことはないが然も天下滔々として此原則に洩れないことをやつてゐるのである。

だから第一の急務は顔の鏡を知りて、その正直に信頼するやうに、心の鏡が何ん

であるかを知りて、それに信頼するにある。然らばこの心の鏡とは如何。

心の鏡は社會である。社會の様々の出來事は、吾々一人一人の心の影、心の姿である。社會といふ鏡は正直に吾々の心を毎に映し出して呉れる。第一に注意すべきことは、毎日のやうに「新聞」を讀んでゐると、親に孝行をしたとか、團體の爲めに善いことをしたといふやうなことを讀んでも、成程心の表面には感心はしてゐるが、内心には一向親みを感じぬ。この反對に、強盜、強姦、火つけといったやうな兇暴な血腥い記事に接すると、口では宜しくないとか、極悪非道だとかと悪口をいふが、内心には妙に共鳴を感じ、興味を覺えることである。是は甚だ奇異なることであるが、吾々の心は、その本音を叩けば、美しい清いものが出ずして、醜い汚いものが出るので、社會に表はれた様々の不善な事は、その實吾々の心の姿、心の影であつて、吾々は其本性が可愛ゆくなつかしいのである。表面の倫理の世界には、それを侮蔑し非難するけれども、本心には脈々たる共鳴を感ずることである。

だから社會の様々の出來事を、單に外の事にして考へずに自分の心の表はれとしてよく／＼身に引きあて味うて見ると一々自分の心に成程とうなづかれるに相違ない。例せば或人が犯罪をなしたものがあるとすれば、それを身に引きあて、もし自分もあの境遇におかれたならばと考へると、さうした犯罪の種は一々自分の内心の中に、あることが感ぜられるであらう。

かやうに味うてみると、社會と自己とは全く根抵が一つであることが知られ、社會の出來事を見ることによりて自分の心の姿を知ることが出来ることに驚かざるを得ない。吾々はこゝに至つては根本的に他人を責めることが出来なくなる。即ち他人を責めることは、自己を責めることになるからである。かやうに全世界を一身に引き受けることによりて、吾々は初めて改正の出來ない久遠劫來の罪惡者であることを承認せられてくる。

新しい生命の道は此門を開いた所に、それ等の人々を導くであらう。

二四 戦ひの轉換

平和を好みながら何故人は戦ふのであらふ。國と國との戦ひは、その名はいかやうにもあれ、戦ひそのものは、大虐殺、大屠殺である。それにも係らず、人間の歴史が立ち初つてからこのかた、世界の大部分の國民が、本氣になつて國と國との戦ひを禁めようと試みたのは、あの恐ろしい大戦後はじめしのことだ。それまでは、少數の平和論者があつたにしても大部分の人々は、平和を標榜しながら、腹の中は戦ふことは當然のこととして頻りと軍備を擴張したものだ。して見ると、もし東西の多くの賢者達が昔から云ふてゐるやうな平和といふものが、理想であり、それを實現することが、人間の第一の努力であり、そしてそれが眞の文化であるとするならば、その氣付方がなんとといふ遅いことであらう。

人生といふものに樂天的な考へをもつてゐる世界的の平和論者は、この所を深く考へて見ねばならぬと思ふ。彼等は平和を理想としてゐることは賢者達と異ることではない。併し第一になぜ人間は長い間互に戦ふて來たのであるかといふことを考へない。徒らに「戦ひ」を咀ふものは、名を「平和」にかりてゐても、その實は「快樂」を貪る人である。戦ひを好む者が、野獸の本能に支配せられてゐるといふならば、徒らに、「平和」を愛する人は、怠惰と物質上の快樂たのしみに腐れゆくのだ。これは一つの根からでた二つの毒草で、共に人間の性そのものを、深く見徹して居らない。釋尊は少年の日、野に耕す人々を見られた、その歎の先に一疋の虫が掘り返れると、傍に飛び交してゐる鳥がそれをすぐつえばんだ。虫の痛みは若い太子、未來の聖者の痛みであつた。彼はその場に居るに堪へないで、傍への森の中で、一日中考へられた。「慙いひれなことだ。有情は互に噛み合つてゐる」と叫ばれた。その靜觀の内容は文書に傳へられてないから、委しくは解らないが、有情の性といふもの、生

活といふものを深く突込んで考へられた事は慥かであると思ふ。後年、家を出て道を求め、六年に亘りて苦行を修められたが、結局少年の日に經驗せられた冥想の一日を想ひ起し、徒に肉體を虐むことの愚かなるを悟られ、心で考へることによりて、覺りに至らんことを求められた。そして偉いなる目的はそれによりて果された。

私はこの修道の經路きやうじゆについて、大凡三つの階段があることを認めさせられる。第一に、釋尊は人間の噛み合ひ生活に氣がつかれた。そしてそれに深い痛みを感じられた。それを裏から云へば、彼の平和が破れたのだ。人生の愛の調和が恐ろしい噛み合で破られた。何故かやうにして生活せねばならぬかといふ疑問が、若い魂ひの持主の胸に湧いたのだ。これは何んでもないやうであるが、人間の生活の根本に對する最も深い疑問である。この疑問の起らぬ前は、人生といふものはまだ生れてこない。卵につままれた鳥の生活である。一度愛が眼ざめ、理想が輝きいつる時、人はその愛、又は理想といふものを、認める代りに、自分の周圍の不調和に氣付く。そ

してそれが自らの不調和の如くに苦痛を感じる。愛する者が、互に噛み合ひ、殺し合ふものを、どうして黙つて眺めて居られやうぞ。兄弟が血みどろになつて狂犬のやうに噛み合つてをたら、親はどうして痛みなしに見て居られやうぞ。若い賢者の惱みはこれであつた。「愍れな事だ。有情は噛み合つてゐる」とは、なんといふ深い痛しい叫びことであらう。その痛みは、森の寂かな處で、深い冥想に耽つて、それによりて心の調和を回復するより外に除き去る術はなかつたのだ。

二

併しどうしたら生物の戦ひを止めることが出来るのであらう。或意味に於いて、此疑問を解くの鑰とも云ふべきは、南北兩傳に残された數百の本生譚である。それ等釋尊の前生の物語りの中に一貫する思想は、生物に對する徹底的の慈愛である。或時は鹿の王となり、身を殺して愛する多くの鹿を救ひ、或時は王子と生れて、飢えた乳虎が、あはや生んだ子等を喰はんとする刹那に、身を割いて生血を見せ、虎の

餌食となつた。數百の物語りは多く是等の生物の存在にせまるギリ／＼の所まで突込んで、その最後の解決として生身を捧げることに終る。そしてそれは徒らなる生物界の法則として弱肉強食を認めるのではなくして、この冷い法則の中に暖い慈愛の血を濺ぎ、そこから大なる精神の世界を建設せんとする希望と努力に満たされたのであつた。

よしやこれ等の物語りは、道を求めるといふとは、徒な思辨や快樂を貪る爲めではなく、大なる愛と、動かぬ平和を見出すことが第一歩であること、そしてギリ／＼の所までゆけば、その愛の道の爲めに、喜んで身を捧げることにあるといふとを、雄辯に語つてゐると思ふ。現實の世界は何んといつても、戦ひの世界である。諍ひは最も親しかるべき一家庭の上、親子、夫婦、兄弟の間に最も深刻に行はれてゐる。人はよく、貧ほど辛いものはないと、貧しさの苦みを述べ、富を成るべく平均に分配すれば、人生の苦みは脱れうると主張するが、物質上の生活には、何んの不自由

もない人々の間に却つて細やかな深い戦ひが行はれつゝある。それは愛の分配に對する戦ひである。一枚の衣服でも、一皿の肴でも、疑ひの眼で見れば、僅かな不足の分配が、直ちに自分に對する「愛の不足」と感じて、不懺となり、不懺が嫉みとなり、遂に憎みとなり、心に怨みの刃を磨いて、いつしが復讐してやらうとまで思ひ込むことは、珍らしいことでない。かやうに感ずる人々の中で、心の弱いものは、自ら身を傷みて、病に罹り、又は氣を狂はせる。親の愛が弟丈に注がれると邪推して氣狂ひになつた若い娘があり、弟に愛が獨占されたといふて、放蕩に身を持ちくづした兄もある。かやうな沈黙の中に行はれる愛の闘争のいかに深刻であるかは、少しく眞面目に人生を觀察し、自分といふものを省みたものは容易く了解せられることであらう。

眼で見える戦ひ、肉體の戦ひは、心と心の諍ひに根をもち、それが心の本性そのものといつてよい位にまでに根をもつてゐるので、釋尊は恐く自分といふものを其

儘にしておいて、徒に外的な手段でそれを止めることの出来ないことを知られたに相違ない。かやうに切りつめてゆけば、先づ自分を救ふことが第一であるといふことになつたのが、あの出家と苦行で、これが、第二の經路である。

しかもその苦行といふものも、第一の場合のやうに、徒に「ものを慙み、悲み、はぐむ」と比べては、内面的となり、自分といふものに立ち返つてはゐるが、矢張り、自分の肉身といふものを虐んでゐる點から云へば、尙ほ生活の根本を突いてをらぬ。かくて第三に苦行を捨て、心そのものに突き進まれた。靈の勝利の歌はそこから響いて來た。「心は畫師のやうに三界を作る」「心こそ第一の怨みである。他人を怨むことはない」「瞋恚は火のやうだ。未だ他人を燒かない中先づ我身を焦す」又は「外道は境界を主とするが、我教へは心を主とする」等は、實にこの聖者が慘ましい修道から生れた智慧の花、智慧の果實である。その後の生活は、盡きざる愛の泉をもつて、世の苦みの火、毒我の火を消し止めんとする壯烈な戦ひであつた。

そして、この戦ひは多くの常隨の弟子達すら、その細やかな點に亘りて、恐く了解することが出来なかつたであらう。

三

人が無常を恐れるのは、此戦ひの心をもつてゐることに氣付くからだ。他に惱み
を與へるころ、他と諍ふ心がないならば、どんな變化も恐れることはない。人が
苦むのは、生活のあらゆる部面に亘りて戦ひ、他を傷け自らを傷め、互に害ひ合
て、平和を破り、愛の基調を損ふからである。戦ひの心の前には、世界は虐殺の場
である。美しい愛の花も、血に塗れて萎えしほむ。かくて心が亂れ、家庭が亂れ、
國が亂れ、世界が亂れる。

戦ひを轉換せしめよ。快樂と、憍りと、瞋りの爲めに戦ふ心を内に換へて、その
樂しむ心、憍る心、瞋る心に向つて戦へ。この戦ひの勇者の一人たる佛弟子、多羅
弗多は叫んだ。

「心よ、我は何處にても、汝の語を守りぬ。

多生の間、汝の怒りを招かざりき

されど汝の感謝としては、只この肉身あり

汝のなせる苦惱に長く輪廻せり」 (赤沼兄の譯による)

一蓮院秀存師は自らを呼んで「存よ、よう聞いてくれよ、存よ」と云はれた。佛
のみ心が、いつしか人の心の主となる時、いままでの心は主の位置を迂つて客とな
さしめられる。此時「我心よ」と呼ぶのだ。もう彼は主人でない。蓮師も「佛法を
主とし、世間を客人とせよ」「世間機惡し、佛法の上より何事も働け」と申された。
戦ひはこの時轉換せられて、佛心と凡心との戦ひとなる。この内部の戦ひの連続が、
信仰生活の名にて呼ばる。或時は凡心が本城を占領せるかと怪まれ、或時は、佛心
が本城の主と表はれる。これが外部に表はれる時、或時は「他の爲めに善をなす報
謝の行」と讃へられ、或時は「あれでも信の人か」と誇られる。

戦ひの轉換はそのまゝ、亦愛の轉換となる。これまで不純な愛を得る爲めに戦ふた心をかへして、純な愛に生きんとして戦ふのだ。そしてその靈の戦ひは、自らなさしめられるやうになる。かやうにして彼の周圍はそのまゝにして大いなる道場となるであらう。こゝに至つて戰場はそのまゝ、道場である。彼が家にあつても、家の外にあつても、又は日本にゐても異國にゐても。

二五、人生の逆觀

一日友の誕生日の祝に招かれて、四五人の一行で宇治に遊んだ。水晶を溶かしたやうな激流は、大きな波紋を描いては崩れ崩れては描いた。眼がさめるやうな綠林を吹き來る夏の夕風、久しく黃塵の中に埋られて、むすほれたもやくやは、一時に洗去られた感じがした。

やがて、汗を洗うて高樓の一室にあつた。日は河を隔てた蕃山の上に入らんとして、餘光が夏の入道雲を美しく彩つた。誰いふとなく、『景色は一體寢て見るものだ』と出ひだした。併しその室は一尺許り闕が上つてゐるので、寢て見るわけにはゆかなかつた。他の一人は『それは何んといつても股の下から窺くにこしたことはない』と云ひ出す。併し二人は女で、三人の男も、書生時代は昔の夢と遠ざかつた

年輩なので、皆が顔を見合はせてほゝえんだが、暫らくは誰も試みやうとするものはなかつた。

突然K氏が、いつもの眞面目な顔を少しも崩さずに、ちやうど其御得意の患者を診察するやうな態度で立ち上ると、浴衣の裾を両手ではし折りて頭を倒にした。云ふまでもなく股から眺めたのだ。ほんの瞬間、呆氣にとられたが、やがて常識がその領野に立ち返つたとき、みんなは腹を抱へて、この天來の滑稽に笑ひこけた。そして婦人達を除いては、皆磁石に吸はれる鐵のやうに、矢張K氏のやうな眞面目な態度で股ぐらから覗き出した。

なんといふ美しい眺めであらう。つねなみの眺めが畫とすれば、これは彫刻ともいふべきであらうか。景色が深さを示し、明かるさを増し、活々と輝いた。眼に近い流れは深淵のやうに人を吸ひ寄せるやうな執着をあらはし、岸に立ち並ぶ家々は折から輝く燈びにはえ、屋根瓦の色のゆかしさは、何に譬んやうもない。家を埋め

て遙の天涯と口吻ける蕃山、繁山の緑の濃さ薄さ、それ等が解き流した天女の帯のやうな淡紅色の夕雲と對比せられて、『この世ながらの天界だ』と叫ばしめた。

女達は片手を闔につき、その描いた輪の中から頭を斜倒まにして、その福音の味はひを一つにして喜びの聲をあけ、肥つた二十貫餘の女中は、男の向こふを張りて倒さまに覗き込む。讚美と滑稽が交響樂のやうに鳴りて、暫時人々をつねなみの意識から奪つた。

『これは驚くべきことだ』とK氏はいひつゞける。『倒さまになるので、網膜の中にある別の神経が光線の刺撃を受けるのだ。これで思ひ出す。私の知人で或る事件から布哇の獄窓に呻吟することとなり、一年の後放免されたが、獄屋を出であのタンタラス山を見た瞬間、「あ、山が私を招いてゐる」と叫んだ。併し、次の瞬間には何でもなくなつたといふ。吾々は景色を平凡にしてゐるんですな』

と例の眞面目の瞳を輝かす。

『そうです』と私は應じた。

『心理學者の説によれば、人間はだん／＼と自然を觀念化するのださうです。幼兒の時は、お月様をシヤボン玉と同じに思ふてゐる。彼等には隔離の感覺はない』
『それがつまり年を重ねて、自分共の生きるに都合のよいやうにしなすのですな』とK氏が言葉を入れる。

『そうです。だから若し吾々が幼兒の様な印象を今でも持つてゐるならば、恐らく生きてはゐられないのでせう。生命をつゞけるために、この恐しい誘惑力と刺撃力のある自然を、自分等の造つた型に入れて仕舞ふのですな。近代印象派の鼻祖と云はれたゴホーの如きは、木でも、草でも燃えてゐるやうに感ぜられ、それを畫面にあらはす際に、とても繪筆を用ゐることが出來ずに、繪の具をなすりつけたそうです。その結果、發狂して仕舞つた。私達が今倒しまにこの景色を見て驚いたのは幾分それに近いものを見たのでせう。

併し、平凡な生命をつゞける爲めに、自然を觀念化するのには止むを得ないことであるが、何等かの方法で、型離れのした自然を見る必要がある』

話の間に一二の人達は腕で造つたアーチの中から倒見を壇にした。やがて日はトツブリ落ちて、對岸の電燈が流れに映り黄金の柱が河の底から輝き出づる。

K氏は亦『私はその昔、信濃の旅舎で、窓を押し開いて月を見た時も、このやうな驚きを經驗した。私は生れて以來たつた二回限りだ』と語る。

『これは景色ばかりでなく、人生の凡ての部面に亘りても是と同じなのですな』と私はいふた。『純な心の持主となつて居れば、平凡と見ゆる住居も恩寵に輝くであらうし、又何とも思ふて居らぬ家族の人達に對しても、特殊な値が見えてくるに相違ない。人の情が眞に嬉しく感ぜられる時は、屹度私共の心の蓋がとれて、實の如く人の心に觸れるのであらう。いや私共は時々、物を見なほさねばならぬ。

佛典をそれからそれへと、拜讀してゆくと殆んど凡てに一貫してゐる思想は「計

らひを離れよ」といふ釋尊の教へです。そしてその『計らひ』といふは物といふ物を自分の煩惱を本として作り上げた型の中へはめて仕舞ふことです。何もかも「自分のものにしやう」「自分のものだ」と思ふて、凡てを自分の欲望のめあてとする。そこから様々の不幸が生れる。第一に心が倒になつてゐるから、ものを倒に見る。『目連尊者の母親が「倒懸」の苦しみを受たとはそれですな』とK氏はいふ。

『さうです。畢竟、人間は一面みんなこの餓鬼の苦しみを受けてゐるのです。尊者の母親は、尊者の供養した飯を火炭と見たといふ。吾々もどれ程といふ價値の知れない世界に住んでゐながら、それを全く看過して困つたくといふてゐる。所謂「水に居て渴くく」といふてゐるやうなものです。この煩惱が型を造ることを業の報るといふのでせう。煩惱が様々に起るに従つて、周囲を様々に造りかへてゆく。生死の流れです。』

x

x

x

夜は九時を過ぎた。宿の主の贈つた與市兵衛爺のもつやうな提灯をさけて、宇治の橋へ赴く途中、一行は交るく、對岸の萬碧樓の不夜城の景を倒見しては驚嘆した。今の吾々の人生觀はその實倒見である。この見方を逆にすることが必要である。そしてそこには『求道』といふ廣い遠い領野が開展してゐると泌々感じた。

二六、「愛し得ぬ悩みに就いて」

一

或會合の席で、二三人の婦人達の中に或問題が起つた。それはその婦人達の友人で、兎角他人の影口を云ひたがる人を、此會合に誘ふたらよいか、悪いかといふのであつた。中にはその友人と途上で今日逢ふたが、何處へゆくかと聞かれたけれども此處へ来るのだといふことを告げることが出来ないで、辛うじて胡摩化して来たといふ人もあつた。話がだんく進んで、一體さうした人に對してどんな態度を取つたらよからうかといふ問題に移つた。

よう聞いて見ると、その問題になつてゐる人は、中傷離間といふ程でもないが、甲の事を乙にこの事を丙に、或ることないことを手柄顔に告げてあるく、さて逢ふて

見ると、そんなに憎くもない。一度は腹を立て、見ても、絶交するといふ程でもない。又さうする程の勇氣もない。併し其人にさうした癖がある爲めに、友達の人達は、事々につけて迷惑でもあり、厄介であるといふのである。中に氣の弱い人は、その人に話すことの出来ないやうな會合は出ることを見合さうかとも思ふといふ。何故かと云へば、後でその人に聞かれると、尾に踏つけてそこ、そこを觸れまはつて歩くから。

成程婦人の人達の間柄には一寸起りさうな問題で、男子の間柄にも随分かうした人が居つて、種々の迷惑を醸すことも珍らしくない。是について種々と考へさせられた。

二

かうした癖のある人を友達にもつた場合、之に對する態度は、大分けにして三種あると思ふ。

一は積極的に此人を愛して、悪い所を忠言することである。他の言葉で云へば、面と向つて忠言しても其人が悪感情を起さぬ程に、いふ人がその人を愛し、又その愛をその人がよく了解してゐるといふ關係でなければならぬ。つまりほんとうの意味に其人を愛し、どこどこ迄も捨てないといふ態度に出ることである。

二つには、上の態度が取り得ないとすれば、斷然絶交する、かうした人と交際してゐると、生活の上にくの故障が起つて、自分一身のみならず、自分の關係のある他の人々にも迷惑をかけるから、さつさと關係を斷つことである。

三つには、上の二つの中間をゆく。進んで忠告もしないが、それかとして絶交もしない。まあ好い加減に交際してゆく。その代りその人の性癖をちやんと呑込んで、自他ともに迷惑のかゝらぬやうにきりもりをしてゆく。云はゞ煮切らぬ態度であるが、多くの人達、殊に婦人の人達にあつては、此第三の場合である人が多いと思はれる。

三

此中、第二、第三は誰しもたいした困難を感じずにやつてゆけるが、第一の場合が非常に困難である。母が子を愛するやうにどこ／＼迄も捨てずに、悪い所はドシドシ忠告するといふやうなことは、友人でもさう澤山あり得るものでない。非常に氣心も知り合ひ、利害關係もなく、又長い間交際したといふやうな間柄でなければ、中々さうした態度には出られるものでない。孔子も「諷諫に従はん」と云はれたやうに、さうした間柄でも實際の効果は、遠廻しに覺らせる所の諷し諫める方がよいと云はれてゐる。眞の愛をもつて、ドシドシ云うてやるといふことは、實際の場合非常に妙いと云はねばならぬ。

扱て問題は是から第一歩を運ぶのである。即ち上述の第一の場合を各方面にあて箴めて考へて見る。

私共一人々々の上に、親に對し子に對し、兄弟、親族、友人に對して、果して、

それ程迄で徹底的の愛に立つて交際つてゐるからどうかといふのである。即ち上の例に於ける忠言するといふことは、まだ愛の生活の特別の場合に屬するものであるが、この他に一番普遍的の事柄は、互に物事を打ち明けるといふことである。又苟も愛してゐるならば、互に隠し立てせず、何事も打ち明けて了解しておくことが甚だ重要である。否なこの打ち明ける程度に應じて、愛の程度も計りうると思はれる。

これ程に重要な事を吾々はどれ程に互に打ち明けてゐるか。一人の爲めに打ち明けても他の一人の爲めに打ち明けられぬ場合がある。愛がないのでない。たゞ徹底的に愛し得ない爲めである。否もう一つ云へば、私達の周囲の人達が、皆な理解を異にし、性格、境遇を異にし、利害關係を異にしてゐる爲めに、皆んなが皆んな徹底的に打ち明け得ないのである。さて結果はどうなるかと云ふと、最初に話に出た婦人のやうに、自分の行く先きを打ち明けられない場合に、何んとなう疚しいやうな気分となり、其人を裏切つてゐるのでないかといふ一種の煩悶となつてくる。此

場合、もし、その打ち明けられぬ人に愛がないならば何んでもない。愛のない人は路傍の土塊と同じであるからである。然るに疚しい感が残るといふのは、愛してゐて、而も愛し切れぬ、云はば徹底的の愛に立てないといふことに歸結すると思ふ。

四

徹底的に愛し得ない身であり、又實際上、周囲の關係から云ふてもさうした愛に立てない状態にありながら、一方にはさうした愛に立たないといふことが、甚だ遺憾であり、又自分の道徳上の責任を果してをらぬといふやうに感ぜらるゝことは、甚だ興味あることと思ふ。即ち理想と現實の衝突である。理想から云へば、萬人を愛し、凡てを萬人に公開してゆきたいのであるが、現實の場合には力及ばず、眞に打ち明けることは生活上甚だ僅かの部分に屬する。こゝに一種の「疚しさの感」となつて私達に苦みを與へるのである。

之をもう一つ他の方面から觀察すると一層この矛盾の本が明かになる。それは私

達の愛を内面的に見るのである。即ち若し私なら私が妻でも子でも、友人でも、誰でもその中のたつた一人を絶對的に愛し、他は残らず土塊位に考へるならば、そこに何等の「疚しさ」はあり得ない。その代りその愛者以外の人には話もせず、見かへりもせず、何等の交通を保たないのである。極端に云へば、自然の景色さへも見ないのである。かやうな愛の専有を實行し得るならば、愛し切れぬ苦痛はあらう筈がない。ダマンチオの「死の勝利」の中のヂョールヂオは愛人イボリツタをこの意味に於て専有しやうと試みた。彼に取つてはイボリツタが道ゆく外の男を一目見ても、嫉妬の種であつた、その一目の間、彼女の心にヂョールヂオがないと考へたからであつた。彼は愛人からあらゆる注意も感情も自分に向つて専注して貰ひたかつた。愛人の愛が一念でも他へ散れば、もうその瞬間には、自分といふものが捨てられてゐるからである。かうした望みは人間世界には充されるものでない。最後は愛人を殺すことであつた。巖上から衝き落す瞬間にイボリツタは恐怖と憎悪と救助と

のあらゆる強い思念を彼に注いだ。彼は夫以上求め得なかつた。結果は愛の破綻又は愛の病的變態であつた。

だから愛の専注も専有も實際には出来るものでないとすれば、私達の愛は分裂するものとせねばならぬ。愛が種々の關係を異にする人々に分配されるとすれば、そこには徹底的の愛のないことは明かである。況んや、こゝに問題になつてゐる愛なるものも、純粹な利他一方のものでなくして、實は自分といふもの、欲念の變形したものでだんだん反省して見ると、他を愛するといふことも、所詮は自分を愛する變形であることが知られてくる。母親が自殺するとき、自分の子を殺すことが其最も見易い例である。彼女は「かうした淺ましい恐ろしい世間に可愛い子を置いてゆかれぬ」と心に思ふのであるが、事實はこれに反し、自分の最愛なるものを他人の手へ渡したくないのである。自分の子供をいつしか道具のやうに取扱ふてゐるのである。子供を自分のものとして、夫を立派な愛の名の下に私して殺すので、愛とは云

へど恐ろしい利己的愛である。否是は一例であるが、私達の心が、貪り、瞋り、痴け、誇り、疑ひ、悪見によりて出来上つてゐる以上、その愛なるものは、所詮自分に都合のよい範囲内に於いてなされるもので、仲がよいとか、理解し合ふといふことでも、嚴密に批判すれば、似たやうな煩惱を出し合ふ相互の性格の集りといふの外はない。況んやその愛さへも八方に分裂するに於いてをやである。

五

之を要するに、私達は愛して愛し得ないのである。「ものをあはれみ、はぐくみ悲む」聖道門的の愛の破綻は必然の結果である。そして残るものはどの方面に向ひても「疚しさ」の感である。妻に打ち明け得ても親に打明け得ず、親を諫め得ても子を諫め得ず、最後は、只獨りボツチの生活となる。愛する資格のない、愛し得ぬ自分であると覺れば、その愛を誇り、他の愛の不足を罵る資格はない。私達はこゝに初めて無限の愛の塊りたる大慈悲の如來に振り向き、その愛の御手に抱きとられ

るのである。泉をもつてゐる井がいかな早魃にも干く事がないやうに、如來の愛の泉に連れる吾等の愛も細けれど乾くことはない。愛して愛し得ざれども悲しむことはない。愛の供給が無限であるからである。

二七、冬の日物語

「さあ、どうぞこちらへ、狭苦しい處で御座いますが、家中で一番暗い室です」
T内儀は心から親切に自分を待遇して呉れる。それは霜月の中旬ごろで、東北特有な例の土蔵座敷に、長火鉢を置いて、湯氣は盛んに室を温めてゐる。

「今日の御縁にも、運よくあなた様から来て頂いて、どんなに嬉しいか知れませんが。先夫も逝くなります前に、もう覺悟してゐましたので、大層あなた様をお待ちしまして、又延びたく〜と聞いて、ある日の如き滑稽半分に、學問を澤山する住職は、却つて學問のない住職よりも劣る。困つたものだ、と申しました」

この内儀さん、話し上手で、そして數十年來の聽聞で、ア、ク、抜けがしてゐるので、話してゐても、聞いてゐても氣持がよい、その代り遠慮なしにべら〜しや、べる。

「この室で御座いました。先夫の逝くなりましたのは」

と内儀さんは語りつゞける。そして尙その當寺の幻影を追ふやうな眼をして、

「もう私も安堵しました。あんな人がよう喜ぶやうになられたかと思ふと、全く不思議に思はれてなりません。」

ちやうど十四五年前から、私は佛法聽聞を始めました。何分四十を越した位の年で、冬になりますと、毎晩のやうに御説教を聞きに出掛るので、それはもう小言の絶へ間はない位でした。ある晩のこと、なんでも十年ばかり前でせう、いつもより少し遅れて歸りますと、表の戸が開きません。若しや〜と恐氣つきながら歩いて來たのですから、胸の中へギ、クリと應へました。小聲で若者の名を呼んで、明けてくれと頼んだがよく寢入つてゐるので、起きて呉れません。ものゝ半時間も立ちつくしました。寒い雪風が吹いて來て、手足が覺えがないやうになりました。それでも時々おづおづしながら、若者の名を呼んで、戸をガ、タ、〜させながら、頼みました。

若者が漸と起きる氣合がしますと、先夫の聲で『明けるな』といふ腹立聲が聞こえます。再びギクリとしました。こんなことは度々でした。」

と内儀さんは眉を寄せて語る。

「御存じの通り先夫は大工で、醇一本な、正直者でしたから、人の云ふことをきくのが大嫌ひで、説教なんか、始めつから聞いたことはありません。寺へもまるつたことはありません。只御本堂再建の時副棟梁株で働きに参りましたが、妙なもので、あれからそろそろ佛法に近寄るやうになつたのです。」

御恥しいことですが、私は先夫を憎みもし、又怨みもしました。先夫は何遍も隠し夫があるのでないかと私を責め苛みました。そして佛法聽聞を口實にするのだと言ひ張つて、果ては参詣するなと罵しり、夫が今度は私が御内佛へ参詣するのさへも邪魔にしました。

併し不思議なことには、先夫の此仕打ちが、却て私を益々深く佛法に入らしめる

やうになり、御話が身に沁みて有難う頂けるやうになりました。私もだん／＼に先夫の毒々しい仕打ちに馴れまして、後には餘り苦にならぬやうになりました。又先夫も十數年來の私の行狀を見て、自づと疑も霽れたらしいのです。

御寺へ働きにいつた後で可笑しいことには、或朝佛様に御酒一杯供へられてあるのです。聞いて見ると、餘り酒がうまいから如來様だつて飲みたいだらうと思つて、私があけたと先夫が云ひます。私も思はず吹き出しました。そして如來様へは御神酒をあけるものでないと申しました。後から聞いて見ると、先夫が御内佛へ参りたいたので、極りが悪いので、態とそんなことをしたのださうです」

内儀さんは「し、や、べつてばかりゐて、お茶もあけませんで」と辯解しながら、私に茶をすゝめ菓子をすゝめ、又候話を進める。

「ちやうど昨年五月でした。死ぬ一週間ばかり前の或朝、此西に向つた戸を開けて呉れと云ひます」

その時内儀さんは「一寸御寒いかも知れませんが」と戸を押す。重い戸は車がついてゐるので、安らかに開いた。見れば冬枯の野を隔て、西方の連山は雪を頂いて冬の夕日に照り榮えて美しい。

「私が戸を開けるとあゝよい景色だと云ひます。それと同時に、手を合はせて床に起き直り、有難い〜と稱名しますから、驚いて問ひますと、先夫が申すには、是だ〜、私は長い間、佛法に敵對し、御前の聽聞に邪魔を入れた。煩惱の戸で眼がくらんで、佛法の景色がわからんかつたのだ。今御前が戸を明けた丈で此好い景色が見られる。戸が閉つてゐては、眼の前にある景色が見えない、かう申して、涙を流して御念佛してゐるのです。

私もほんとうに吃驚しました。そしてどんなに嬉しかつたか知れませんが、「あ、好い所へ氣付いて呉れました。如來様の御影です」といふて泣きました。先夫が申しますには「私は馬鹿な奴で、根性が曲つてゐる。今日まで何一つ立派な事をした

ことはない、如來様はこんな者を救ふて下さるとは、なんといふ有難いことだらう」それから際立つて喜ぶやうになりました。或晩「どうです、先のことゝが氣にかゝらないか」と問ひますと、「何お任せした上は、煮て喰はうと焼いて喰はうと如來様の御勝手だ」と申します。或夜はまた殆ど一晩中御念佛を申しつゝけるので、少し心配になりまして「御念佛が過ぎるやうですが、まさか稱へる力で助けて頂くといふではありませんまい」と云へば「そんなことは夢にも思はぬ。昨夜は念佛してゐると、氣持ちがよくて、自づと一晩中稱へることゝなつた。何病人は晝も眠つてゐるのだからな」と云ひます。

兩人で炬燵へ入つてをります時、時々想ひ出したやうに「今頃御院主様は、遠い處に何してゐられるかしら、歸られると珍らしいことが澤山聞ける」とよく申しました、そして御歸り前一月で逝くなりました」

私は長い内儀さんの話を興味と感動をもつて聞いた。大悲のみ心が、人間の上に

まざくと働いてゐて下さることを感じて、折々法悦に濕うされた。

冬の日影は咲き残つた寒菊に彷徨うて、五六間彼方の裸枝に残された七八つの柿の實を赤く照らした。そして逝くなつた信者の前に、尊い經典と開展した美しい眺望を更に再び不可思議の念ひをもつて眺めた。

二八、第三の天使

罪人が地獄へ墮ちて、閻魔大王の前へ牽き出されると、大王は新來の罪人に向うて、「お前は人間世界にをつたとき、三人の天使に逢うた筈であるが、どうだ」と尋ねる。罪人が「逢うたことはありません」といへば大王は「三人の天使といふのは、「老」と「病」と「死」である。汝は何故に此天使に逢ひながら、放逸の日暮して、かやうな處へ來たのであるか」と責められるといふ。是は「阿含經」の各處に説かれてある一節である。他の所では、嬰兒と刑罰を加へて五天使ともいはれてをる。私は、この譬喩的に説かれてある小な記事が、或意味に於て、釋尊の内秘を公開し、佛教の現實上の立場を明かにした極めて重要なものであると、深い興趣を感じる。

道を獲得する前の釋尊に取つては、此三つは三大惡魔であつた、それは若い悉達太子の歡樂と青春の希望とを一と括めにして打ち砕くものであつた。彼が人生の亂雜なる種々相の中から、ちやうど音樂の天才が、多くの雜音の中から調和ある音律を創作するやうに、此三の恐るべき事實を選んだのは、彼が單に明敏な理智をもつて作られたといふ理由からでなく寧ろ人生を熱愛したからだ。彼は誰よりも愛の破綻に苦しむ素質を多く有してをつた。他の言葉でいへば、自分といふものを動かぬ衰へぬ愛の芳香の中に置きたかつたのだ。然るに「老」は目前の事實として、青春を奪ひ、「病」は健康を、そして「死」は生存を毀つ。愛の破綻は必然的に來る。苟も思慮あるものは何人も否む事の出來ない自明の事實である。それは若い太子に取つては良に恐るべき謎であつた。そして萬人の前にその共通なる謎として彼がまづ最初の聲を與へたのだ。それは上にあげた任意の一罪人に向つての閻魔王の質問が證明してゐる。釋尊は道に入られたとき回光返照して人生に於ける此三大事實の上に、

求道上の普遍原理を認められたのであつた。

だから教團の比丘達や、一般民衆に對しても、苟も人生觀上の此三大暗面を根柢としない、あらゆる思辨も、論議も皆な無用の戲論として深く誡められた。こゝに佛教が現實の大地に深い根を下ろしてゐるとともに、一方どす黒い現實の石炭を材料として眞智の火を點ぜられた哲人の深い體驗を味はざるを得ない。

願うに人間の第一の心の歩みは生の充實とその永續性の豫想である。そして是はいつしか萬人の普遍的の要求として公認せられ、あらゆる人生問題を此起點から論ずるに至つた。かくて第一の歩みは遂に最後まで歩みとなつた。是が一般の人生觀であり、「常識」の名に呼ばれ、殆ど終生此天地から一步も進むことの出來ないもの、多くを作つた。そして釋尊は屢彼等を「顛倒の凡夫」と呼ばれた。實に宗教の第一の努力は此常識の破壊に多くの力を費したのであつた。

釋尊は嘗つて四種の名を説かれた。第一の馬は乗者が馬を奔らさんと思ふ時に、

奔る。第二の馬は鞭の影を見て奔り、第三の馬は鞭たれて奔り、第四の馬は鞭たれても奔らぬ。第一は恐く天然の佛にして、宗教を要せぬ人。第四は熔岩のやうに硬化して宗教の火の燃えつき得ない人、そして第二、第三が正しく宗教の對象となる人々である。若くして青春の誇りをすて、健かにして健康の誇りをすて、生存しつつ生存の誇りをすてた若き太子は、老の至らぬ先に老の影を見、病、死の至らぬ先に夫等の影を見て驚き奔られたのであつた。

老と、病は、體驗しうるも、死は體驗し得ないといふ人があるかも知れぬ。それ等の人達は影を見れば足りる。更に一步進んで味へば、此等三大惡魔の領分を通過し得ない人々のあらゆる生活は、つねに老、病、死の影に覆はれてゐるのである。否な眞の生命を缺いてゐるから生きた屍骸に過ぎない。そしてその生きた屍の自覺は、多くの場合愛の破綻から來る、愛する者が、老ひゆくを見、愛する者が病み、遂に死の暗い門に入る時に、吾々は遽然として、自分の日常生活が既に／＼死んで

ゐることを痛感する。それが心の上に表はれて、深い苦惱となる。肉體の苦みが、肉體の存在の主張である如く心の苦みは、心が眞の生命を生まんとする陣痛であるのだ。多くの心靈上の罪惡者は、此靈の産室に於いて徒らに外的手段を用ゐて苦痛を麻痺せしめた。即ち苦みを亦元の現世の樂みに戻さうとするのである。そは靈の子を生むことは、平生の修養を怠る人に取つては、餘りに任務が重過ぎるからである。こゝにどれ程の靈の産兒の墮胎が企てられたか知れない。

數ヶ月以前私は三才の愛兒を失ひ、殆んど毒杯を傾けたやうな苦痛を感じ、嘗つて味つた第三の天使を更に深刻に色味せしめられた。愛する者の死ほど苦いものはないが、又これ程尊いことはない。そして、又恐く悟り切れぬ身には、生涯謎の天使として永く残ることであらう。

二九、落紅を弔うて

(故郷の妻に與ふ)

何から先に書いてよいかわからぬ。涙ながらに思ひのまゝかく。妙子が入院の電報を受取つた頃から、滅たにない頭の具合ひが悪く氣色が悪い。毎日毎日心配になり、手紙だしたり菓子を送つたり、電報打つたりして、漸く慰めた。十八日の二時に學校から歸つて、書きかけてゐる原稿を書き出した。三時から四時頃まで、暖い日なのに、脊中がざあくくと、水をかけられたやうに覺える。風邪を引いたのかと思つて、羽織をきたり、コーヒを呑んだりしたがなほらぬ。夜は友人の宅で五六人會合し、十一時過ぎに裏口から歸つた。電報の來てゐるのは家の人が知らせて呉れなかつた。電報はいつものことで、家の人達も何んとも思はぬ。それでも朝六時に妙子が死んだといふ電報を見た。歸らうか歸るまいかといろいろ思案して一時間

たつた。思ひ切つて歸らぬことにして、自分で七條局で電報うつた。

私も御身も始めて子をなくして見た。御身のことによれば、ほんとに手の中の中珠をとられたと云はうか、魂を抜き取られたと云はうか、今の中は葬式のことなどで氣が張つてゐるから、そんなでもあるまいが、日がたつに従つて、淋しくてく仕方がないことと思ふ。私は又私で、涙が止めどうもなう流れる。なんだか薄い親子の縁であつたと思ふと堪らぬ。妙子がこの世へ來て、一年八ヶ月間、私は何遍妙子を抱いたであらう。昨年東京で逢つた時は、それでも仲よしであつたが、今年はや忘れて、あの通りはにかんだ。京都へ立つ頃やつとなづいて、三四遍抱いた。それでも抱かれながら御身の懐にゐると違ひ、何んとなう私の機嫌を取るやうにして、持つたものを私によこさうとする。それでも私は少しも不快に思はなかつた。どの子もかうであつた。又一所に二ヶ月もをれば、すぐに仲よしになむといふ自信があつた。今から思へば、あの用事で遽に歸るやうになつたのも、妙子に訣れにいつ

たやうなものだ。何が何んだかわかつたものでない。

御身から云へば、苦んで苦しみ通して育て、又病氣にも命がけに看護して、末の末まで見たのであるから、腸も断つほどに嘆いたであらうが、私に取つては又何んとも頼りなく、空を掴むやうで、泣いても一所に泣いて呉れるものなく、實は一時間ばかり歸らうか歸るまいかと思つて苦んだのは、妙子の葬式の爲めでない。御身を思ふたからだ。御身と手を取つて泣きたかつた。世界中この場合、手を取つて同じ思ひに泣けるのは御身ばかりだ。頼りなくて、仕方がない。今朝六時から今十時まで、四時間私は一言も云はぬ。只電報をうつて歸つて来て、葬式のお勤めをした。有難いことには、如來に慰められて、悲喜交々いたり、心ゆくばかりに泣かせて貰うた。まことに如來の慰めがましまさなんだならば私の心は荒野のやうにあれすさんだであらう。やつと落ち着いてこの手紙をかく。

あんな小さな何も知らない子が、小さい魂とともに何處へいつたのであらう。こん

なことを思ふと堪らなく悲しい。併しこのところをよう考へて呉れ。子供の行へを私共のやうな凡夫が、百萬年考へたつてわかるものでない。それは凡夫の考へるべきことでないのだ。私達の仕事でない、如來の御仕事だ。如來が一度は一度、助けねばおかぬと仰せられたことであれば、屹度よいやうにして下さるに相違ない。私達の妙子に對する務めは、御互に妙子がこの世へ来てくれて、私達の爲めに尊い仕事をしてくれたことを、よろこんで御禮申すことである。御身もこれまでいろいろと難儀もしたが、今度ほど悲しい事はあるまい。欲も得もあつたものでない。無常々々と、説教にいくら聞かされても、執着の強い私達の心の耳へは入らぬ。手の中の珠を取られ、生身を切られるよりもつらい、美しい蕾をむしられるやうに、愛をこわされて見ると、いくら執着しても駄目だといふことが知られる。ああ「先立つものこそは善知識だ」とは、何千遍となく人に話しましたが、ほんとうに有難いといふことは今初めてしみじみと感ぜられる。善知識様だ。御身と私とのたつた二人

の爲めの善知識様だ。どうか悲みの中から、この尊い有難い、我子ながらも、如來の御使にてゐらせられる妙子の恩を想ふて呉れ。いつもく「我」をつのり「欲」を起して、眞底から如來の御手強い御慈悲を忘れ勝ちになつてゐる我心の淺ましい姿を見せて頂いて、慚愧と感謝に咽んでくれ。かうした強い御催促がなければ、どこまでもどこまでもつけ上り、自分の都合のよい理窟をつけて、佛法に背中をむける奴なのだ。恐くともすれば、これが後にも先にもない、たつた二人の間で、一度の御手強い御催促かも知れぬ。ようこの處を味うてくれ。

家族が皆んなこつちに引き移らないのなら、私は今度歸るのであつたが、僅の間に京都へ來るのだからと思ひ切つて歸るのをやめた。御骨を伴ふて來て呉れ。一所に大谷の御廟にまゐらう。私は今から大谷の御廟へ參る。たつた一人がよい。御身達も一所にゐると思つて、聖人のおん前で、心ゆくばかり妙子のことを思はして貰ふ。信子も昭子も信度も、皆んな悲しいだらう、小さい妹をなくして、世の悲みの始

めを知つたであらう。是が世の中の謎だ。三天使の御一人たる「死」の使ひ、淨土からのお使ひ、いきた御喚聲だ。たゞ心配になるのは、お身の身體だ。どうか御念佛を喜んで、御念佛を力にして、決して徒らなる悲みや、やけ心や、他人の同情なぞに煩はされずに、妙子を思ふにつけても、親心のやるせない御慈悲に立ち返りて、御念佛申してくれ。悲みによりて我々の醜い心、欲得づくめの心が洗はれて、御慈悲が沁み込んで下さるのだ。御身の身體は決して御身一人の身體でない。大切な大切な佛法の御用に立つ身體だ。残りの三人の子供の大切な母だ。これから又ある丈の力を出さうとしてゐる私といふものゝ大切な妻だ。法の寶と思つて氣を引き立て、靜養して呉れ。それが妙子への何よりのつとめだ。御身がその心持ちで、もの事についても温い優しい心をつたら、妙子はどんなに喜ぶか知れない。妙子はあんなに無邪氣で、あんなに優しくかつた。私も御身も、やゝもすると心が荒れ、いつも諍ひの心となる。妙子に對してすまぬことだ。

何んのかのと書いた。實は歸りたいは山々であるが、御身を信賴して歸らぬ。妙子に對しては、私は親であるから濟むも濟まぬもない。これからはいつも妙子を忘れぬ。妙子は決して死なぬ。いつも私と一所に生きてゐる。一所に御念佛を申してゐる。小さい手を合はしてのの、様を拜んでゐる。それにしても哀れな有様で死んだのであらうね。それを思うと涙が流れて堪へられぬ。病氣は何んだとてよいものはないが、悪い病氣にかゝつたものだ。昨夜も友達の家で四五人の人々の間に妙子がタンドクに罹つたことを話すと、一人の友達が「顔をおかしたのだから大丈夫だ。足から來ると危険だ」というから安心したが、この時はもう死んでゐたのであつた。

どうか妙子を殺して呉れるな。徒に悲しむのは妙子を殺すのだ。自棄氣味になるのも妙子を殺すのだ。妙子を想ふことによりて、如來の御心に歸れば、妙子は心の中に生きる。手や胸に抱いた妙子を、今度はしつかりと心に抱くのだ。念佛の心で抱くのだ。妙子はそこにあの美しい別の種だと云はれた程の奇麗な妙子が生きてゐる。

る。妙子は御身の寶だ。そして又私の寶だ。この生命の寶は決してく死なぬ。とこしへ生きてゐる。私達の心が頑かたくになつて、いらくして欲と瞋いらと愚かに蓋はれたとき、妙子が來てあの可愛い手で、この心の蓋をとつてくれる。そして優しい心になしてくれ。

この手紙は私の魂を吐き出したのだ。どうか妙子の靈前で讀んでくれ。

葬式に列せないで、皆んなの人達へすまぬ。導師をはじめ人様達へ宜敷う申し
てくれ。

三〇、三種の生活

一

五年に亘る歐洲の大戦争が、是迄で世界の人達の誇りとしてをつた文明といふものに、疑ひを起させたので、世界中の考へ深い人達が、一樣に現在までの生活法が間違つてをらなかつたかといふことを考へ直すとも、是からどのやうにやつて行つたらよいかと研究するやうになり、その結果として、種々の改造説が持ち出されるやうになつた。併しそれ等の改造説の多くは、例へば富の平均分配といふやうな、物質上から割り出されたものであるから、矢張り火をもつて火を消さうとするやうなもので、所詮はやり甲斐のないことに終ることと思ふ。私はもう少し突込んで、此問題を解いて見やうと思ふ。

二

私が今述べやうとする三種の生活は、一般是迄での世界中の人達の生活法を反省するとも、是から後に取りるべき方針を指し示さうとするのである。其中の第一は官能生活で、吾々の五官の欲望を主として生活することを指す。是は歐洲に於ても、こゝ二三百年以來のことで、それより前までは、宗教や法律の制裁で、いくら金があつても、一般人は今日のやうな無制限の贅澤は出来なかつた。日本でも御維新前までは、幕府は時々國民の贅澤に流れるのを見ると、法律の制裁を加へることは珍しいことではなかつた。一例を挙げれば、あの有名な光琳が、京都にゐた時、得意な彩筆を振つて派出な模様を案じ出しては、呉服屋の店を賑はし、その結果として、嵐山の花見時になると、旗本の奥様と金満家の妻君と衣裳の競争をするやうになつた。彼は一方にさうした奢侈の風を惹起すとも、自分に亦自分一流の飛び離れた贅澤をすることを忘れなかつた。彼は一日竹の皮に握飯を包んで嵐山に遊ん

だ。大勢の人達は名々蒔繪の重箱に御馳走を入れてをつたので、光琳のこの田舎喫いやり口を冷笑したが、さて彼が握飯を食べ終つて、その竹の皮を河に投げ入れると、その内側は金泥で美しい繪が描かれてあつたので、一同は二度屹驚りして、其御念入りの贅澤さに呆れた。京都の所司代は此を聞いて、遂に光琳を京都から追放した。彼は仕方なしに江戸へ出て一生を過した。その他餘りに華美を盡した町人の妻君方を罰したり、時には絹物を著けることを禁じたりしたことは何人も知る所である。

然るに、明治以後殊に最近に於いて、あの戦時中の景氣のよい時の如きは成金輩の途方もない贅澤加減は全く御話しにもならぬ有様であつたが、何人も制裁を受けるものはなかつた。否制裁を受ける所か、さうした奢侈の生活するものが、一般人の敬ひの的となり、吾もくと夫に模倣う者が多くなつた。是は元より日本のみならず世界何れの處へいつても變ることはない。金さへあれば、どんな贅澤な眞似を

しても、誰も咎め立てするものはない。全くやり放題、勝手氣儘であつた。是は自由の名の下に、世界中の人達が、生れながらの動物的の欲望を擅にする様になつた證據である。そこで私は此時代の特質として此官能生活を挙げたことである。

此は元より一方から云へば、文明の賜であり誇りであるが、其代り人間の魂は、この外部からの甘い刺撃の爲めに、ちやうど麻痺薬を吞まされたやうになりて、眞實の生活を忘れて仕舞ひ、まだその味を嘗めない者は、只管ら官能生活を豊にすることのみを求めて、正しい道を失ひ、恰も障子の紙がめらくと燃え上るやうに、薄つぺらの生活をつゞけ、遂には之を食ふ爲めに無理なこと迄してかして法律上の罪人にまでもなるやうになる。

三

第二に智識生活である。近代に及んで世界一般に教育が普及せられ、智識の程度が高まつた。即ち昔と比ぶれば皆が伶俐うなつたのである。學校と圖書館、博物館

はあらゆる人間の智識を積み集めて之を一般人に授け、彼等は之を學んで、各の職業を獲るやうになつた。即ち學校は職業紹介所であり、その職業の道具は實に智識であつた。

けれども斯様に道具のやうに取扱はれた智識は、生活の資料となつても、心の糧ではなかつた。それは善い品物を造つたり、交通の便を圖つたり、又は巧に人の隙に附け入りて私利私慾を營むに都合のよいものとせられ、進んでは今回の大戦争の如き、大凡こ、三四百年に於ける世界のあらゆる天才の頭腦を絞つた科學上の智識は數千萬の同胞兄弟を屠る爲めに用ゐられた。空を飛ぶ飛行機、水を潜る潜航艇、毒瓦斯、大戦艦、三十里の彼方に達する長距離砲、是等の驚くべき精好なる器械は、單に戦線に立てる戦闘員を殺すのみならず、防禦のない都市に遊ぶ可憐なる子供までも犠牲にした。戦争當時自分は英京倫敦ロンドンにありて、數十回に亘る獨機の襲撃に逢ひ、いかに一般市民が苦んだかを親しく實驗した。婦人達は、恐るべき敵機のエンヂ

ンの音を聞き、是に對して打ち續くる股々たる味方の砲聲に恐れ戦いて、氣絶するものさへあつた。海には數百人を乗せた大な船が、潜航艇の爲めに沈められて、一時に海底の藻屑となつた。一時は英國の船丈でも毎月百萬噸づゝ沈められた。それ等の乗組員や船客が、僅か數分間に爆沈せらるゝ船から逃れ出でんと焦りて海中に陥る様、海に沈みながらも、尙ほ頭はない子を抱きしめて離さなかつたといふ母の念力、すべて人間の美しい愛情も氣高い人格も一時に踏み碎いて、恐れと憤懣の中に、死の領に入らしめたものは、全く人類の誇りとせる智識の産物であつたことは、吾々の決して忘れてはならぬ所である。

『經』に「蛇、水を呑めば毒となり、牛、水を呑めば乳となる」と説かれた。智識は元より害毒でない。それは用る方によつては、どれ程人間を利益するか知れないものである。吾々は今日の便利な交通機關、行政、司法、又は教育上の巧みなる統一と、敏活な運用は、是を古の周圍と比べて、どれ程利益を感じてゐるか知れない。

併し私達の眞の幸福は、決して智識を土臺とした、生活から得られるものでない。若し是を土臺として生活してゆくならば、私達は知らずく蛇になつてゐるのである。生活に便利であればある程、心は狡智くなつて、互に外の方へのみ奔り、間がな、隙がな、他人の缺點を見つけ、自分の缺點を隠し、巧に泳いだり、くどつたりして、自分の私腹を肥やすやうになる。どうしてさうなるかと云へば、智識は書物にかいて蓄へて置き、是を誰にでも勝手に分つことが出来るから云はゞ一つの道具である。使はれるもので、使ふものでない。便利な道具があると、修養のない人は、只是を自分の都合のよいやうにのみ用ゐるからである。古、親に孝行な人が飴を見て、親に食べさせたいと思ひ、盜賊が飴を見るや、錠を開けるに都合のよさうなものだと思ふたと云はれてゐる。同じ飴も見人によつて違ふのは、飴は人間に造られて、人間が何んにでも用ゐるものであるからである。

智識も是と同じく、人間に造られたもので、人間が自由に用ゐることの出来るも

ので、是によりて人間の人格を造ることは出来ない。然るに是まで世界の賢い人達も知らずく各々の作つた智識の美しい光りに眩惑されて、それで何んでも出来ると思ひ込んだ。即ち人間までも智識で作りに上げることも思つたのである。それが今日の教育のやうに、千三百年來、國民の血と流れ、肉となつて來た固有の宗教を度外視して、専ら智識で國民を作り上げるやうになつた。その結果としては、教育を受けた人の多くが、精神に何等の慰安もなく土臺もなく、平素は貰ひ受けた智識を振り廻はして、立派なことを云うてゐるが、少し不幸や誘惑に逢ひ、逆境にでも立つと、或者は狂ふが如く、法律を犯し、或者は怪しい迷信に奔りて、現世祈禱や呪ひまじなの信者となる。之に反して現代の教育を除りに多く受けず、純朴な田舎に日暮してゐる人達は、却つて裕かな心持ちをもつて幸福な生活をつゞけてゐる。それは煩はしい智識に禍ひされないからである。

四

上に述べ來つた二種の生活は、近代の社會に於ける特別な發達を遂げたもので、今までは是をもつて文明と名け、文化と呼んで、誇りとしたものであつたが、今や世界的の大戦亂を動機として、賢い人達は既にその迷ひから覺め、五官の欲望を満す第一種の生活も、便利を主とする第二種の生活も、決して人間に眞の福祉を與へるものでないと悟り、茲に第三の生活に入らんとするやうになつて來た。

それは即ち私の所謂信仰生活である。上にあげた二種の生活は、人に使はれるものであるが、この第三の生活は、如來に使はれる生活である。この意味からして、他力の生活とも云はれる。即ち自分といふ小さい目の前の欲を主とする心で生活するのでなく、大な如來の心を心として生活するからである。前の二つの生活を水に譬ふれば、是は牛のやうなものである。牛が水を呑めば乳となる。信仰の上からの生活は、前の二つの生活を淨化めて、そのまゝ心の滋養物とするからである。

然らば信仰とは何んなものであるかと云へば、私達の心を耕して好き果實を蒔く

ことである。心を耕すとは、平素つまらぬ欲望や、猜疑や、瞋恚の雜草に心が覆はれてあるから、それ等の雜草を刈り捨てるのである。他の言葉で云へば、私達は誰でも自分のことは棚へあけておいて、他人のことをかれ、これ云うてをるが、その外へ向ふ心を内へ引き戻して、他人を批評するやうに自分を批評することである。自分分は朝から晩まで、何を考へ、何をしてをるか、口に立派なことを云うてをるが、心はどのやうであるか、口と心と行ひとが少しも一致してをらぬでないかと、反省するのである。私達が若しも眞面目にかうした反省を續けるならば、誰しも自分の心がいつも顛倒であることに驚くに相違ない。道理をもつて他人を責めるが情實をもつて自分を庇立てをする。情實をもつて他人を容し、道理をもつて自分を責めることをせない。そして心の奥底は「おれが」〜といふ我慢が潜んでゐる。この我慢から快樂を貪りて第一の官能の生活に深入りし、第二の智識を道具に使用して私腹を肥やさうとするのである。今心を耕すといふは、この我慢に衝突つて、自分といふ

もの、眞の相を凝視め、心の奥底より懺悔の念に浸ることである。

かやうに心を耕すことは、取りも直さず、佛の光りに照されたる所である。光明とは智慧のことであるから、自分の我慢の心に氣付くことは、月の光りによりて松影を見るやうに、如來の光りによりてのみ知るのである。この道理を知るときに、耕やされたる心に如來の好き果實が蒔かれるのである。好き果實とは如來の心である。私達の身體がこの世の親によりて生れるやうに、私達の心は、久遠却來のみ親にたまします如來によりて育くまれねばならぬ。私達の此世に生れたほんとうの目的は、此み親を信じ、み親に返ることである。即ち大慈悲と大智慧の心を心とするのである。他の言葉で云へば佛の心と私達の凡夫の心が一つになるのである。

五

この佛心と一つになることから、信仰生活が生れてくる。即ち第一に物の價値を見る眼を與へられる。信ある人は一杯の水も、一碗の飯も、佛物をいたゞいてゐる

のだ。勿體ないことだと喜ぶことが出来る。況んや、その他の凡ての周圍に對しても親族に對しても、友人に對しても、心から敬愛の念ひをもつことが出来る。かくて「先に信を獲たる者は兄後にうるものは弟」「四海は皆一人の御親をもつ所の兄弟である」といふ考へに立つやうになる。世界の平和は唯かゝる人の一人も多くなる時にのみ其度合を増すのである。

凡ての縁ある人々をして、速に前の二種の生活を翻して第三の信仰生活に廻入せしめんことを衷心より念ずる次第である

大地の聖者（終り）

大正十一年十月七日印刷
大正十一年十月二十四日發行

定價金壹圓八拾錢



大地の聖者

著者

山邊習學

發行者

神田豐穂

印刷者

寺田國太郎

印刷所

早稻田印刷株式會社

東京市神田區表神保町十番地

春

秋

社

電話東京二四八六一番
電話神田二一三八番

文學博士

金子筑水

監修・執筆 小田内通敏、柳田泉、木村保美、宮原知久、宮島新三郎、平林初之輔

新學藝講座

定價一冊金 壹圓
送料一冊金 六錢
半々年分金五圓七拾錢
一ヶ年分金拾圓八拾錢
外に郵税を要す

全二十冊			
座講期夏	座講期春	座講期秋	座講期冬
新文學論	最近社會思潮	希臘文藝史	海洋の研究
人文地理學	神祕主義	最近生物學	最近文藝思潮
		最近美學	思想家の宗教觀

◎發行大正十一年四月より十二月までに全部完了す

▽健全なる國家は健全なる知識階級によりて形式さる。而して健全なる知識階級は一日と雖も健全なる知識の吸収を怠る可からず。これ該階級の義務也。責任也。

▽本講座は、哲學、文藝、科學、宗教等の最新知識を、大學の講堂より一般世間へ専門家の手より凡ゆる知識階級へ、解放せんとして企劃せられたるもの也。

▽詳細なる内容見本申込次第進呈

西田天香著

（好評百五拾版）

懺悔の生活

四六版四百三十頁
背布函入堅牢美本
コロタイプ版二葉
定價金貳圓五拾錢
送料金拾四錢

書叢園燈一

▽一絲響を發して萬管これに和す。本書を讀みて斷然家業を廢止したる娼家の主人あり。虚飾の生きたる脱して十字街頭奉仕の群に入れる少女あり。鹿ヶ谷一燈園は新來の求道者にて充滿す。靈界嚮導の光へに滅して道隱れ言ふ乎。親書の相親のみに減たりと争へる親子の庭の中此の世乍隔たれ天國淨土、家

▽洛外鹿ヶ谷に褐衣繩帶の一團あり、名けて一燈園と云ふ。同人は一物半錢を所有せず、常に懺悔の心を持って十字街頭に奉仕し、菩提心によりて行乞す。その園主を西田天香氏となす。

▽天香氏とは何人ぞ。嘗つて倉田百三氏の名作『出家とその弟子』が一世の讀書界を動かしし時、部の人士は作中の親鸞と唯圓とを目して、暗に天香師の心の兩面を材としたるものと噂し合へり。吾人は茲にその當否を斷せず、只、倉田氏が西田師に私淑する事日久しきを言へば足る

▽網島梁川氏は十數年前豫言して言へり。世は自らにして西田氏を知るの機あらんと。本書は西田氏を初め一燈園同人の行事逸話等を紹介批判せる一個の新らしき使徒行傳也。

東 西 聖 僧 傳

中里介山著(三版)

清澄に
歸れる
日蓮

本綴函入 二百五十頁 價壹圓五拾錢 送料金拾貳錢

上野松峰著(十二版)

深
の
人
西行

四六版假綴 二百八十頁 價壹圓五拾錢 送料金拾貳錢

村岸清彦著(三版)

十字架
上の人
ウエスレイ

四六版假綴 四百頁 價壹圓九拾錢 送料金拾貳錢

著者に其の特異なる藝術的想念を托す可く「大菩薩峠」に机龍之助を描きしがこゝには學實なる信仰の一部を表現せんとして、傑僧日蓮を假り來れり。著者は日蓮宗の信徒に非ず。然れども日蓮と同じく東國に生れて、彼の心腹に共鳴する事深く、茲に史實を毫厘も枉げざる新體の小説を創造したり。力と權威と、豪邁の氣に勝る男性的宗教の開祖の面目躍如として紙表に展開す。

これ戀の人、煩惱の人、詩歌の人にして、初めて寂靜の哲人たる西行法師が、壯年胸裡に懐みの萌し初めし頃より、途に晩年一杖一鉢、身を行雲流水に托するに到りし心的經過を詳細に敘す。これ體を小説に假れる歴史と云ふも、可、想を歴史に托せる小説と云ふも可、然れども構想的關係より、歴史を縱に改めたる所謂歴史小説には非ざる也。

ウエスレイの生るゝ何ぞの、霜夜の空に鳴り響くを聞かずや。基督の胸裡の馬槽に生れ給ふべき也。吾等が今、メソヂヤストの英國に生れ給ひしを知らば也。

大坪草三郎著(五版)
雲水良寛

四六版假綴 二百頁 定價金壹圓 送料金八錢

504
98

1883
10/10
10/10

終